葬送文化研究会

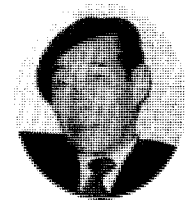
会　報

平成１２年９月　　第３号

目次

会長あいさつ　天野　勲　2
火葬場の跡地考　浅香　勝輔　3
ヘボン博士の墓碑を訪ねて　柴田千頭男　5
活動報告1999年9月～2000年7月まで　7
9月定例会　「インドの葬制」　7
10月定例会　「瀬戸内と四国の葬送文化を訪ねて」　8
11月懇談会　「葬儀社VS付帯業者本音の討論」　12
12月定例会・懇親忘年会　「宗教者からみた現代葬儀と業界」　12
1月懇談会　14
2月拡大幹事会・懇談会　15
3月　「八木澤先生を送る会」に併せて参加　16
4月幹事会　18
5月定例会　「葬送業界への警鐘を唱える」　20
6月定例会　「世俗文化における宗教と葬儀」　21
7月定例会　野外研修会　22
活動報告一覧　1997～1999年度　23
平成12年度活動計画　26
一九九九年葬文研旅行十月十三日・十四日・十五日　浅井　秀明　27
葬送文化雑感　（最近おもうことあれこれ）　下村　侃　30
葬儀業界との出会い　杉浦　昌則　31
サービス業の生命線　木野島光美　34
四国研修旅行　田中のり子　36
「葬文研によせて」　世古口治子　37
未来に！！　阿島　武志　39
葬儀を思う　後藤　尚孝　41
「寺請け制度」はもういらない！　寺壇関係の崩壊　二村　祐輔　42
葬文研　会則　46
会員名簿　47
奥付　50

会長あいさつ



天野　勲

会長あいさつも三号（三回目）ともなると、前々回、前回と同じような文字の羅列になるようで気後れするのは否めないと考えています。もともと文才のない私。三号発刊に当っても会員各位の叡智に期待しておる次第です。編集委員、事務局の方針として三号までは自由課題とし次回発刊からは、会員各位の専門分野での研究発表の形態としたいと申されています。これまで培われた経験・体験・実証を赤裸々に発表していただくことこそ、葬送文化研究会の会報に相応しいのであろうと思います。私も会員各位におくれをとることなく更なる研鑽を重ね努力する所存です。よろしく御指導下さいますようお願いする次第です。

前号のあいさつの文面中「六月研修での会員　山田慎也氏のことを〃お葬式大好き〃と自称されると紹介したことに対し、数人の方々から〃どのような方〃等々問い合わせがあり、山田氏自身にも不快な想いをさせたのではないかと紙面にてお詫びと共に〃葬送文化を大切にする若き研究者である〃と訂正いたします。

平成十二年の研究会の目標は、宗教と葬儀、それに拘わる各地に伝わる、葬送の研修などが主な目標とさせていただきます。各位の御協力を願うものであります。末筆になりましたが、会員各位のそれぞれの場でのご活躍とご健勝を祈念いたし会長あいさつとさせていただきます。

火葬場の跡地考

浅香　勝輔

現代の日本社会を支配しているある種の価値観は、できるだけ先を急ぐという、新幹線的発想である。新幹線的発想というのは、「途中の省略」である。

新幹線ができてから、東京・大阪間が「ひかり」号で僅か三時間ほどで行けるようになり、旅行というものの性質が根本的に変わってしまった。出発地と目的地が直接に結ばれるようになって、途中が省略されるようになってしまった。途中ということは、旅行では「道中」ということである。この「道中」のない旅とは、一体なんであろうか。旅はもはやこれまでのような地域の連続のなかでは考えられなくなった。

乗物の速度が速くなったこと自体にすべての原因があるわけではない。むしろそれを要求していった資本の論理にこそ問題があるのだろう。途中の省略ということは、経済学的には人と物に対する資本の支配が、時間的にも空間的にも強まったということだろう。資本の利潤にとってもっとも効率的な時刻表が人々をかりたてて、生活の内容を変えてしまった。

それぞれの個性的な風土と歴史で隙間もなく埋められて連続していた地域性は、ばらばらに解体され、古い個性は表面的な画一性の下に沈んでいく。在来線の急速なローカル化がそれを象徴している。古い個性そのものも異質なものに置き換えられたり、煙滅に瀕している。表面からは、沿線の防音壁やトンネル化に象徴されるように、なにも見えなくなった。地方都市の沿道はどこに行っても、シャンデリアの輝くパチンコ会館と、万国旗のはためく中古車の展示場といった同じ風景になっている。

そういう現代的状況のなかで、私の専門とする火葬場のあり方も、大きく変わろうとしている。

民間資本を利用して社会資本の整備を図るプライベート・ファイナンス・イニシアチブ（ＰＦＩ）推進法「民間資金活用による公共施設整備促進法」を活用し、地方公共団体に代わって公営火葬場の運営を引き受けることで効率化し、赤字に悩む地方公共団体の負担軽減を図ろうとする、火葬場の「ＰＦＩ」研究会が、私のかかわる火葬研究協会で、すでに昨年（平成十一年）の夏から始っている。

それとは別に、大手ゼネコンのなかには、十数人で「ＰＦＩプロジェクト推進室」をつくり、英国の事例などの研究などから、地道な努力を始めている企業もある。

そうした新しい民間資本の活用が、直ちに地方行政をスムーズに前進させるとは考えられないし、ＰＦＩで民間企業と契約を結ぶには、さまざまな詰めが必要となるだろう。

こうした火葬場への新しい動きに対し、地方公共団体もまた、火葬場運営に「見識と力量」を示してほしいものである。

そのためには、冒頭に記したように、「途中の省略」をしないで、その地域の火葬場の歴史と足跡とを、素直に顧みることが絶対に必要である。それらについての記録保存を蓄積しておかなければならない。

市街化や施設更新などによって、歴史性を有する火葬場を、郊外などに移転させて、供用を廃止させた火葬場の跡地をもつ都市も数多い。しかし、意外に忘却されているのが、その跡地の活用の問題である。

私はいま、その問題に目をつけて、ささやかな研究を始めている。公園

や公共施設にした所も多いが、更地としたまま二十年近くを経過している都市がいくつもあって、火葬場跡地は「嫌忌」の問題もからんで、さまざまな結果となっている。

そのような跡地は、一般に都市計画では、市街化区域に属している所が多く、市街化調整区域に属している所は少ない。市街化区域内では用途地域などを定めて、計画的に都市的土地利用を促進しているが、今日では、かって火葬場の存在した個所が、第一種低層住居専用地域に指定されている所すら出てきている。例えば、茨城県ひたちなか市、新潟県新潟市、静岡県三島市、同富士市、京都府宇治市、兵庫県川西市、山口県萩市などである。

さすがに、「かつて、ここに火葬場がありました」と、堂々と名のっている都市は少ないが、それでも、公園と化した一角や、小空地に、旧火葬場の記念碑を立てている、志（こころざし）のある市や町がある。私の踏査した範囲では、宮城県仙台市、山形県長井市、福井県敦賀市、静岡県田方郡韮山町、滋賀県大津市、同長浜市などにその例が見られる。

そのような小さな研究の報告を、平成十二年九月十六日に関西大学で開かれる、日本生活文化史学会で発表することになっている。

ヘボン博士の墓碑を訪ねて

柴田　千頭男

葬送文化研のみなさん、ご無沙汰しております。またまた、弁解になってしまいますが、昨年三月で、定年退職になり、さて、これから自分の事ができるぞ、と思っていた矢先、招かれてアメリカにわたり、三度目のアメリカ生活をしてきました。三年間という提案でしたが、もうこの年の人間に三年間は長すぎるので、一年という逆提案をして、アメリカは東部、ニュージャージー州のバーゲン郡に滞在しました。ハドソン河という大河をはさんで、ニューヨークに隣り合わせの州です。東部は、三十数年前にワシントンで仕事をしていたので、初めてではありません。この州のイーストオレンジという町は、あのジェームス・カーチス・ヘップバーン博士（日本ではヘボンが通り名になっているので、以下ヘボンとする）が日本を離れて、逝去するまで、その晩年を過した町であり、そこに博士とご家族の墓地がある。ぜひそこを訪ねたいという、年来の希望がかなえられました。

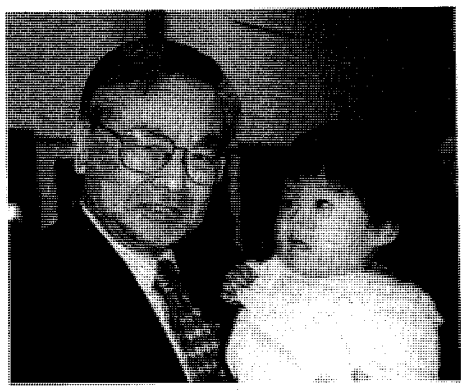
ヘボン式ローマ字の発案者が博士であることは、周知の事ですので、ヘボンの名は日本人には大変親しいものです。しかし博士は、プリンストン大を卒業後、ペンシルヴァニア大で医学を専攻した医師、日本に初めて来たプロテスタント・キリスト教の宣教師、一八六七年（慶応三年）には、当時最高の学的水準を持った『和英語林集成』という初の和英辞書を完成させた学者、そしてなによりも、二十年近い歳月がかかった、ギリシャ語とヘブル語の原典からの本邦初の聖書完全翻訳の中心にいた学者、また明治学院大学の創立に携わり、その初代総理であった、というきわめて多岐にわたる活動により、日本の教育、文化に計り知れぬ影響を与えた人物なのです。日本に来る前、すでに博士はニューヨークに病院をもち、名医と呼ばれた評判の医者でしたが、四十四才の時、親族、知人に狂ったのか、と言われるほどの大決断をして、それこそ一切合切を捨てて、夫人と共に狂瀾怒涛の幕末、あの安政の大獄の翌年安政六年（一八五九年）に来日し、日本歴史の生き証人になりました。例の生麦事件で薩摩藩武士に切りつけられ負傷したふたりの英国商人の治療にあたったのも、博士でした。博士の門を叩いて教えをこうた人物には、大村益二郎や高橋是清、井深梶之助をはじめ、多くの日本の俊英たちがいます。わたしは大学で、若い人々に博士を知っていただきたいという思いをこめ、常に博士の紹介をしてきました。この人ぬきには明治は語れない、と思うくらい、わたしは博士に心をひかれますし、その書簡集（岩波書店『ヘボン書簡集』）は、ぼろぼろになるまで読んでいる愛読書です。そのヘボン博士夫妻は、三十有余年の日本滞在後、明治二十五年（一八九一年）に日本を離れ、故郷ニュージャージー州のイーストオレンジでその余生をおくりました。明治四十一年（一九一一年）九月二十一日、九十六才で博士が逝ったその日早朝、日本では明治学院のヘボン館が焼失し、火災の最中、ヘボン死すという電報が届いたという稀有の事実が残っています。

ニュージャージーは、緑のまことにゆたかなところで、公園の中に町があるような美しい州ですが、昨年夏には、生まれて初めて四十度を越す猛暑の日々を体験し、この冬は冬で、連日マイナス十五度、体感温度二十度以下という、これも初めての体験をしました。とくに冬は雪がよく降り、

帰国が迫ってくるにつれ、これではもうヘボン博士が永遠の眠りについているイーストオレンジを訪ねることはだめだ、と半ば諦めていましたが、「先生、行ってみましょう」という誘いがあり、わたしの住んでいた町からハイウエイを一時間ほど南下し、その町のローズヴァレー（バラの谷）という広大な墓地に、博士の墓碑を捜し当てました。根雪に一面覆われた広大な墓地に、明治学院が開校百年を記念して建てた新しい墓碑と、古い家族の墓がありました。同行した知人がまず、博士のレリーフと日英両語での碑文のある墓碑を見出し、先生、ありました、ありました、という大声をあげてわたしに合図してくれました。わたしは墓碑に手をおき、身の遥らぐような感動を覚えました。博士は来日後、暫く横浜の成仏寺に住み、そこを診療所にあてていました。現在も成仏寺には記念碑があり、そこにあるのと同じレリーフがここにも刻まれていました。博士については、語りたいことは山ほどありますが、人生のもっとも活動的な時期を、外国で、金銭にまったく無関係な仕事に全身全霊を打ち込み、不朽の足跡を日本文化に刻み込んだ人と言わなくてはなりません。明治政府は、勲三等旭日章をもって感謝の意を表し、母校プリンストンは法学博士を贈ることで、博士を生んだ母校の誇りを表明しました。しかし博士が「金にも銀にも遥かに勝る尊いもの」「わたしが日本に贈る最大の贈物」と呼んだ聖書の日本語への完全翻訳は、歴史的な事業でした。わたしも新共同訳聖書という最新の翻訳に翻訳者のひとりとして、十八年間も携わりましたので、その苦労は並のものでないことを体験的に知っております。満足な辞書もない明治初期に、アメリカ人が日本語への翻訳をした、これは実に驚くべき事です。今なお、名訳の誉れの高い明治訳聖書の中心に、ヘボン博士は委員長として、また訳者としていたのです。政治・経済だけで関係が論じられがちな、日米の歴史の冒頭に、こうした無私にして、純粋に日本と日本人を愛した人がいたことを紹介させていただきました。わたしは博士の墓碑の前に立って、墓地というものの意味はなにか、をもう一度考えました。さまざまな論議がある昨今です。しかし、歴史が生者だけのものでないことは、家族にとっても、国家にとっても事実です。去っていった人々抜きに今を語ることは、本来不可能だし、それは生きている者の傲慢です。墓はそういう生者と死者が形成してきた家族や国の歴史の実態を、わたしたちに語るものでもある、と思いました。日本の丁度反対側に位置するニュージャージーの、日本では知る人も少ない小さな町の、この墓地に立ちつつ、わたしはしきりにそのことを考えました。ことしの三月のことです。鮮烈な体験でした。

ルーテル学院大学名誉教授

アメリカより帰国直前のスナップ



お孫さんと

活動報告１９９９年９月～２０００年７月まで

＊99年7月の定例会報告は会報2号に記載

99年9月定例会　　9／20　東京電機大学

「インドの葬制」

―現地調査報告から／記録写真を中心にして―

講演　山田慎也 氏（葬文研会員）

昭和43年（1968年）　生まれ。

慶応義塾大学法学部法律学科卒業。同大学院社会学研究科博士課程卒業

論文：葬制の変化に対する一考察／葬制の変化と地域社会

死を受容させるもの／地域社会における葬祭業者・・等多数

95年1月　表現社「SOGI」誌上にて・・・

地域社会における葬儀の変化　1～6

第五巻1号～6号まで連載

92年　東京都北区　北区史　民俗編の編纂

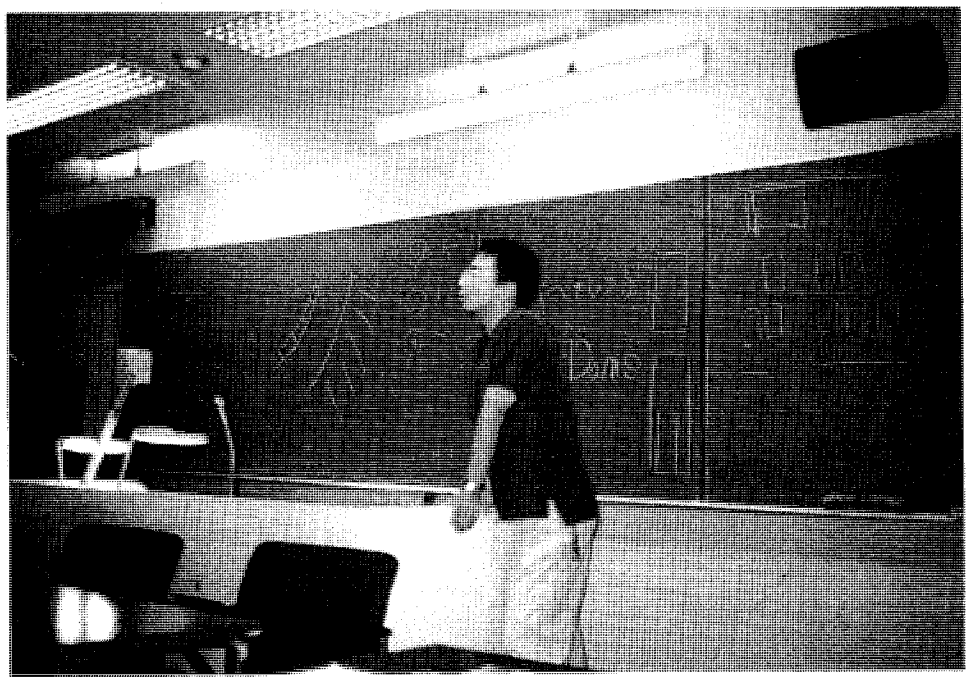
98年刊行される「日本民俗大辞典」吉川弘文館の民俗学的な

用語の辞書事項執筆

国立民族学博物館（大阪府千里万博公園内）勤務の後

現在、国立歴史民俗博物館　民俗研究部　助手

＊会員の山田氏は、現在佐倉の歴史民俗博物館の助手として活躍中で、新進の民俗学者でもある。特に現代に至る葬送の分野を中心に、葬制や祭壇の成り立ち変遷に造詣が深い。定例会では、インドでの葬送に関する調査研究をスライドを用いてわかりやすく講演していただいた。中でもバラナシ（通称ベナレス）におけるガンジス川川原の火葬状況を克明に検証し、日本の葬制や習俗との共通点・相違点など比較対照してお話しされたのが印象的である。



99年10月定例会　10／13・14・15

「瀬戸内と四国の葬送文化を訪ねて」

10／13　東京発　のぞみ7号　8時52分　岡山着12時
マイクロバス乗車（㈱いのうえ様ご配慮）――エヴァホール岡山（㈱）いのうえ　井上社長講演／施設見学――吉備・造山古墳見学（解説郷土史研究家長谷川先生）―エヴァホール倉敷見学――（㈱）ほうりん（仏壇）見学――倉敷国際ホテル着17：00／泊――チボリ公園内にて夕食会18：30（儀礼文化研究所　下村氏より　おかやま四方山話）／自由行動

10／14　朝食後　倉敷の美観地区など散策―ホテル発―瀬戸内海を橋で渡り四国へ―与島・休憩―屋島　藁屋着（讃岐うどんの昼食）／屋島散策―長尾しずかの里（八木澤教授設計の最新の火葬場見学／先生の講話）――四国八十八番札所／大窪寺（結願の寺）参拝――琴平着18：30／琴平リバーサイドホテル泊

10／15　**朝食後　現地解散　9：00**

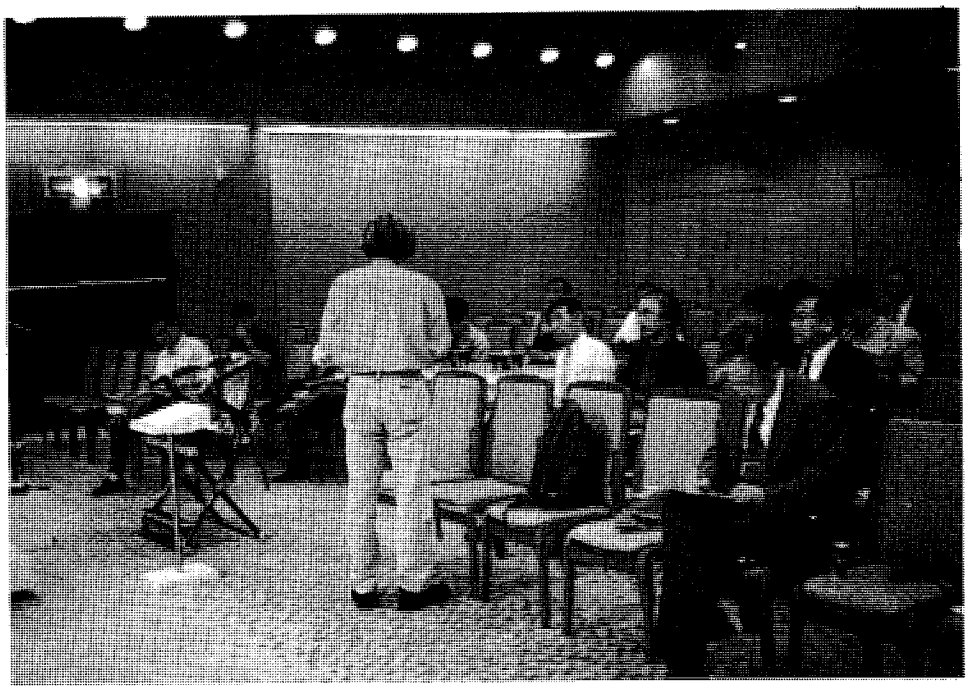
早朝　金比羅さん参詣等　自由行動

善通寺　弘法大師誕生の寺（真言宗特別総本山）

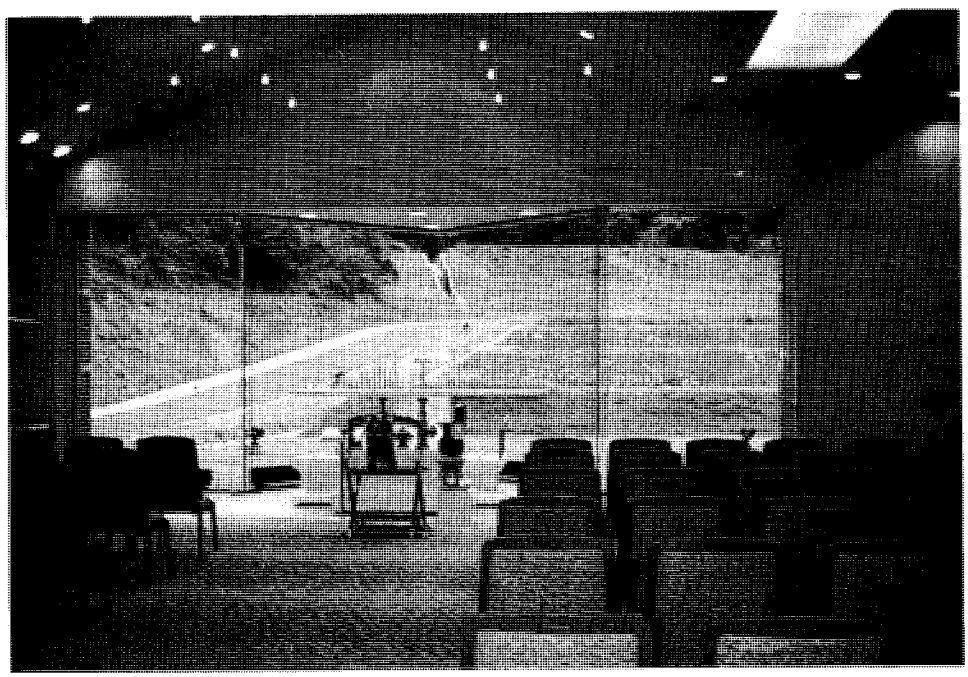
帰路は岡山／尾道発の新幹線・・または高松空港からの空路など自由（下村氏が岡山まで同行案内）

＊今回の研修旅行は、井上社長をはじめ、下村氏、清中氏など、㈱いのうえの皆様にはほんとうにお世話になりました。中でも井上社長のご講演は、葬祭業務に儒教精神を踏まえられているところをお話しいただき、参加者の多くが感動をしておりました。また、かねてより、当会顧問の八木澤教授よりお話ししていただいていた「しずかの里」を実際に見学することが出来、あらためて実感をもつことが出来ました。総勢15名の今回の研修記録は、途中参加や最終日の自由行動からそれぞれが自分の都合にあわせながらの研修が出来たことに満足しています。本会報の中でも寄稿を掲載していますので是非お読みください。また天野会長も祭典新聞に紀行文を掲載しています。

古都 倉敷の街並で…



しずかの里で講演する
八木澤先生と参加者



しずかの里
斎場よりの景色

琴平へ向かう
車中風景

途中
八十八番札所
大窪寺に参拝

倉敷での２次会席
井上社長から
ボトルの差入れも
あり感謝

最終日 早朝
金比羅さんへお参り

99年11月懇談会　11／17

「葬儀社ｖｓ付帯業者本音の討論」　東京電機大学

コーディネーター

葬儀社側　㈲浅野商店　代表取締役　浅野晴夫氏

付帯業者側　㈱セレマ　代表取締役　杉浦昌則氏

11月は懇談会として参加者の皆様に大いに語っていただきました。

＊ひとつの葬祭現場を構成するものは、葬儀社だけでなくいろいろな、職域の企業が集まり、その連携をとって成り立たせていきます。そこには、お互いに協力し合う場面ばかりではなく、それぞれの立場から、より良くする為の提案や提言などもあります。普段「下請け」だからと云う遠慮がちな姿勢をこの場では、よそにおいていただき、それぞれが一ご葬家に対して、何をなすべきかを議論しました。葬儀社・付帯業者と云う図式の中で、気がついたことは、付帯業者はいろいろな葬儀社の比較対照をしながら、葬儀手法などへの提言をしているが、葬儀社は、自社サイドの手法貫徹を目指しているという、視野の格差を感じました。出席者も大いに語り、こういった懇談会をまた開催して欲しいとのリクエストを事務局に寄せていただきました。

99年12月定例会・懇親忘年会　12／13　巣鴨　割烹　みやこ

「宗教者からみた現代葬儀と業界」

パネラー　予定者　浄土宗　天然寺　住　職　後藤尚孝　氏

日本ルーテル学院大学　講師　上村敏文　氏

東京大学大学院宗教学研究室　講師　村上興匡　氏

12月は定例会・忘年会して、宗教者の会員をパネラーに迎え現状葬儀と葬祭業界に対して、各種のご提言を投げかけていただきました。懇談会形式で出席会員のご質問や日ごろお考えになっている葬送にたいしての懸念などを踏まえまして、パネラーの先生方と活発な討論の後、楽しく忘年会を行ないました。参加の先生方には来年の定例会講師をお願いしました。

＊会員それぞれの業種からいろいろな角度で現代葬儀にまつわる問題点や宗教離れ現象など、市民の意識動向などもご報告していただきあらためて葬祭事情の検証が把握できました。特に

①　宗教者としてとしての現代葬儀の捉えかたを知ることが出来たこと。

②　葬儀司祭者の立場で、業界に対する要望を吐露していただいたこと。

③　今後どのような変化が想定できるか等々・・ご提言をいただいたこと。

これらをもとに、今後のテーマが膨らんできました。特に上村先生や村上先生には、最先端の研究者として今後のお付き合いをお願いいたしました。早速ながら、本年6月と9月に講演をお願いすることになりました。

向って左から一人おいて
後藤住職、
上村先生、
村上先生

パネルディスカッションの
あと、引きつづき
平成11年の忘年会

平成12年一月懇談会1／26　　東京電機大学

一月は毎年恒例により八木澤研究室の学生による研究発表。それぞれの研究課題についてプレゼンテーションを行ないました。

＊「参拝形式から見た追悼空間の場所と多様性について」
東京電機大学大学院　八木澤研究室　・・浅見慶紀　氏

＊「火葬場に対する理想及び設計コンセプトと建築的評価の関係について」　同　研究室　・・荒川智穂　氏

＊「新聞死亡記事にみる葬儀動向の時間的変遷と今後の展望について」　同　研究室　・・高橋直樹　氏

＊「既成市街地にみる合意形成プロセスとその留意点について」
―東京都の火葬場のケーススタディー
同　研究室　・・田村久子　氏

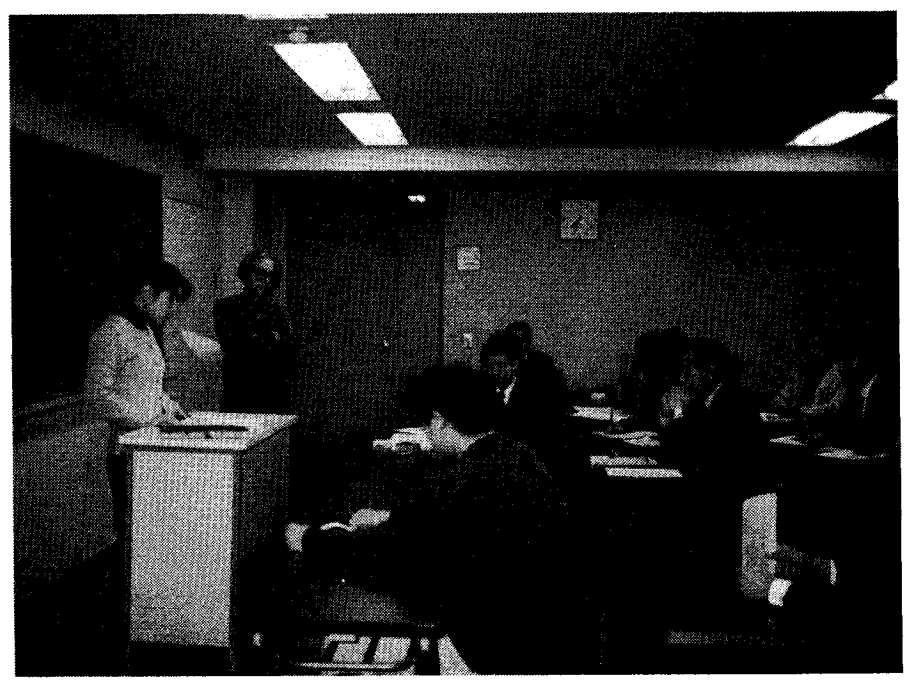
＊毎年恒例で、若い学生さんの素直な研究発表が期待できた。出席会員の多くがその道の「専門家」であることから、鋭い指摘や示唆が飛ぶこともあり、担当教授の八木澤先生が一生懸命フォローされておられるのが印象的で、ほほえましく思えた。

平成12年2月16日

会員企業の中で、韓国からお客様をお迎えしたところがあり、葬祭企業や火葬場の見学を希望されたので、葬文研でお世話させていただいた。勝山氏（大成祭典）のご尽力で、桐ケ谷斎場と大成祭典の会社訪問をしていただき、その後懇談をしました。

ご来賓氏名

PARK（朴）TAE　HO　氏ソウル市役所老人福祉課　主任
LEE（李）PHIL　DO　氏保健社会研究院　主席　研究員
LEE（李）YUN　HEE　氏LG常緑財団　課長
MOON（文）HONG　BIN氏生活改革国民協議会　幹事（韓国YMCA）
YANG　JAE　HYUCK　氏F・Kエンジニアリング



平成12年2月21日　拡大幹事会・懇談会　　東京電機大学

進退役員関係合意事項として

＊継続役員

会長　天野　勲　氏　・・留任

代表幹事　浅香勝輔　氏　・・幹事から代表幹事

幹事　杉浦昌則　氏　・・留任・会報編集委員兼務

幹事　勝山宏則　氏　・・留任・会報編集委員兼務

幹事　上村　聡　氏　・・留任・会報編集委員兼務

幹事　大杉実生　氏　・・留任・会計委員

幹事　藤井　高　氏　・・留任・会計委員

東日本　㈱すがわら葬儀社　・・留任・菅原氏・世故口氏

地区幹事

西日本　㈱いのうえ

地区幹事　・・留任・下村氏・清中氏

監査　稲村吉彦　氏　・・留任

監査　杉山昌司　氏　・・留任

顧問　八木澤壮一氏　・・留任

顧問　山床節子　氏　・・留任

事務局　二村祐輔　氏　・・留任

＊退任幹事・・・鈴木義久氏　清水　康氏　横田　睦氏

＊新任幹事・・・浅野晴夫氏　岩崎孝一氏　後藤尚孝氏

阿島武志氏

新年度活動計画について

事務局試案に対して、議論。総会で決定をすることになる。

平成12年3月　3／13

東京電機大学／如水会館

「八木澤先生を送る会」に併せて参加

当研究会顧問、発起人　八木澤壮一先生は長年にわたり東京電機大学工学部建築科教授として、同大学院八木澤研究室を設け、私たち葬文研の会合等に教室の貸与や人材の供与を賜わりました。このたび共立女子大学に移籍をされ、その節目、お祝いもかねて先生のご関係者が一同に集うことになりました。

葬文研からは、天野会長、事務局二村がその集いの発起人に加わり、些少ながらお手伝いをさせていただきました。そこで会員各位に対しまして、3月の定例会を「八木澤先生を送る会」に参加していただくことに振り替えさせていただきました。

当日は、電機大学1階の大ホールにて、最終講義を多くの関係者が聴講し、その後、一橋の如水会館にて懇親会を執り行ないました。葬文研会員有志の多くのご出席を賜わり、他の関係ご出席者と楽しいひとときの中、交流もさせていただきました。

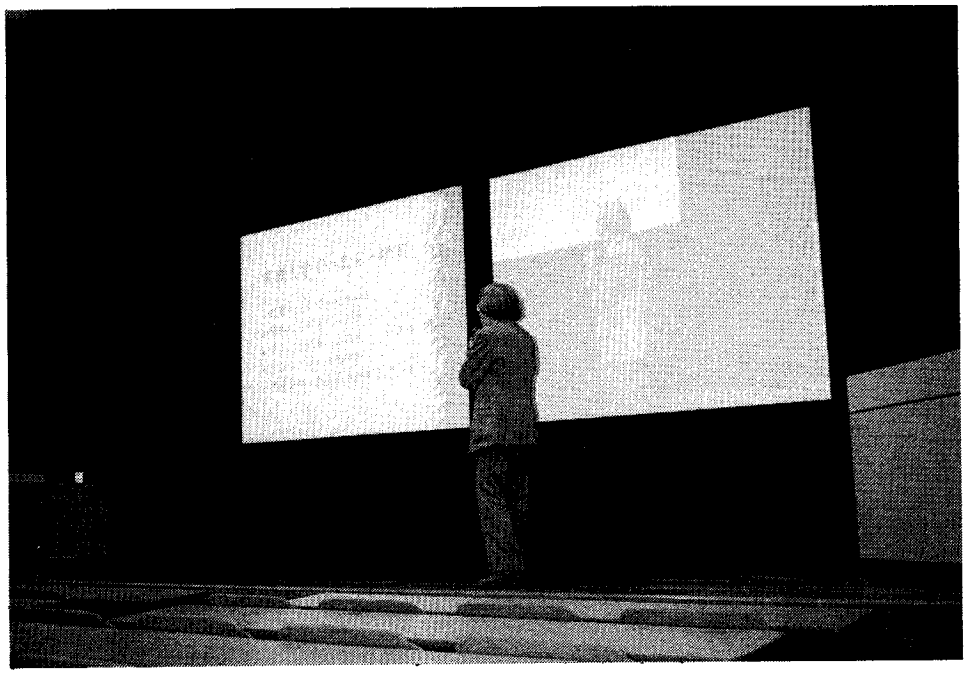
電機大学学長の挨拶をはじめ、そうそうたるご出席者の中から、当研究会からは日本大学教授、浅香勝輔先生が軽妙洒脱なご挨拶をされ、送る会にふさわしいにぎやかな集まりとなりました。

終了後は、八木澤先生おなじみの神保町「さぼうる」にて、奥様もご同席を賜わった2次会を、葬文研有志にて主催させていただき、お疲れのところにもかかわらずご出席をしていただきました。研究会といたしましては、これまでの当会に対するご尽力に感謝をすると共に、またその移籍を記念して、八木澤先生に対して「永久会員」（終身年会費の無償等の功労特典）としての登録承認を幹事会で全員一致の賛同を得ました。

今後の八木澤先生のご連絡先としまして次のご案内をさせていただき、ご報告をさせていただきます。

共立女子大学　人間生活研究室／家政学部生活美術学科建築専攻
同　大学院人間生活学専攻（博士課程）教授　工学博士
＊101—8433　東京都千代田区一ツ橋2—2—1
人間生活研究室　電話／FAX　03—3237—2471
＊共立女子大学　神田キャンパス4号館205A室
生活美術学科住居研究室　電話　03—3237—2656

電機大学最後の
記念講義をする
八木澤先生



挨拶する浅香先生と
八木澤ご夫妻

如水会館の
パーティーにて
向って左から
和田氏、柿本氏、
天野会長、下村氏

葬文研関係にて
記念撮影

平成12年四月「幹　事　会」　4／3
三番町　葬文研事務局

葬文研の活動も年々、拡大拡充しており有望な新会員の参加などもあわせて、今後も幅広い、いろいろな活動が期待できます。運営を支える幹事会員と本年度活動計画や総会開催の事前打ち合わせなどを組み立てました。

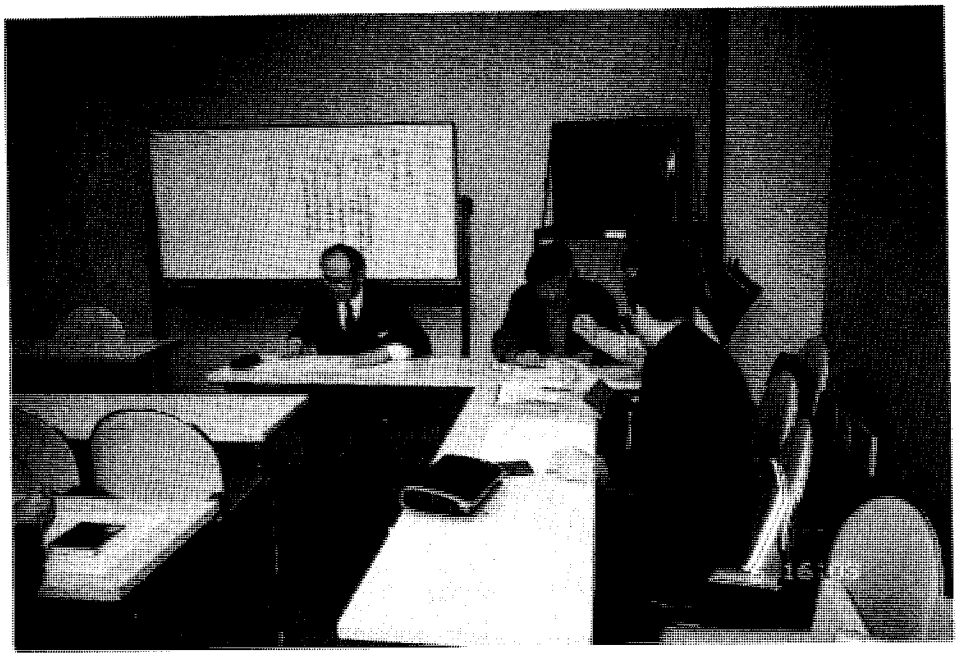
案件
Ⅰ．次年度活動についての提案やご意見
Ⅱ．次年度役員改選について・総会開催について
Ⅲ．会報3号作成について
Ⅳ．その他の案件　・・

葬送文化研究会　平成12年度「定　例　総　会」4／21

定例総会は午後6時より千代田区の区営斎場　万世会館6階会議室にて執り行なわれました。26名（社）のご出席と不都合で出席できなかった委任状を踏まえ、総会員数67名（社）の過半数をへて、総会規定に基づき開催されました。
開式にあたり、満場一致にて議長に浅香氏を選出し、下記の要件について報告、承認をいただきました。

議　事　　第1議案　平成11年度活動報告に関する事項
・・事務局から報告
第2議案　　同　　収支決算に関する事項
・・会計幹事並びに監査から報告・・承認
第3議案　平成12年度活動報告に関する事項
・・事務局から提議・・承認
第4議案　　同　　収支予算に関する事項
・・会計並びに監査から提議・・承認
第5議案　役員改選等に関する事項
・・退任幹事の報告
鈴木義久氏・清水　康氏・横田　睦氏・上村　聡氏
・・留任役員の提議・・承認
・・新幹事の推薦・・事務局より
後藤尚孝氏（天然寺住職）岩崎孝一氏（㈱吾妻設計代表）
大野益満氏（㈱おおの代表）阿島武志氏（㈲一二三）
以上4名・・承認
第6議案　その他の事項
＊退会会員の報告／新会員の紹介
＊12年度活動内容への提案
＊献体等についての講演提案／外部講師の招聘など
＊葬文研発起人 顧問 八木澤壮一氏のこれまでの電機大学におけるご厚誼と共立女子大学への移籍に際して、感謝と今後のご支援を賜わるために「永久会員」としての特別枠設定提案・・承認
（待遇等の条文は後日幹事会に一任）
＊会報3号原稿の依頼と説明・・幹事編集委員
＊葬文研創立20周年記念に向けた提案
出版物の刊行等のための基金とプロジェクトの編成等

午後7時30分閉会後、懇親会を「肉の万世」にて開催



浅香議長のもと
平成12年度総会が
開催された

新幹事の紹介に
拍手でこたえる

総会後の懇親会

平成12年5月定例会　5／25

千代田万世会館

「葬祭業界への警鐘を唱える」

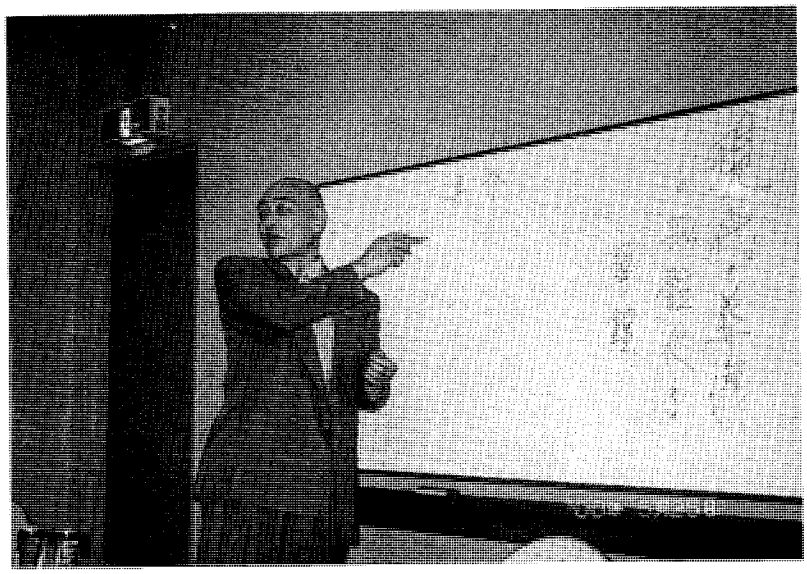
講師・・北川宏峰　氏

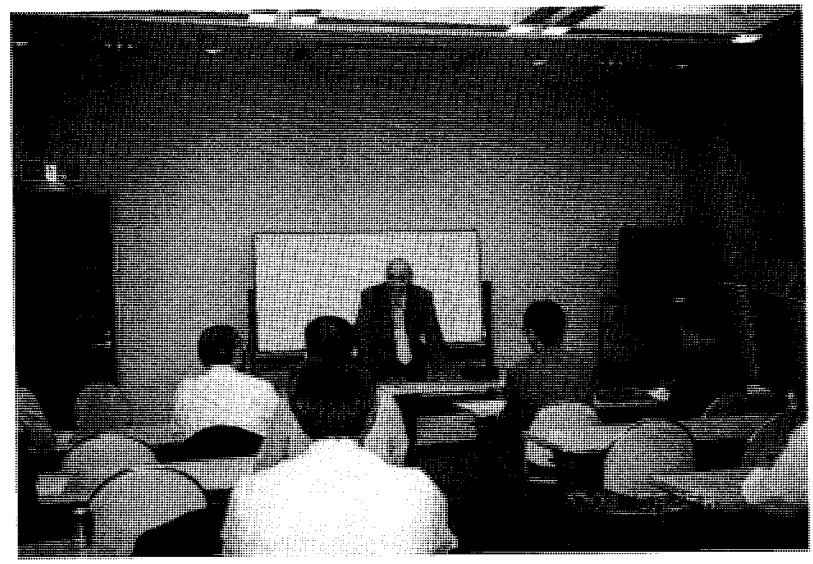
宮城県古川市　曹洞宗　萬渕山　龍昌寺　代表役員（住職）

葬祭センター　株式会社　北　川　代表取締役

宮城県葬祭事業協同組合　役員

僧侶と葬祭企業を営まれているたいへんユニークな講師をお迎えし最近の葬祭業界にたいして、独特な立場からその信仰心や専業者の心の持ち方についてお話をしていただきました。講演後は、北川氏を囲んでの懇親会を行い、参加者からのご質問、ご意見に応えながらの楽しいひとときを過ごしました。





平成12年6月定例会　6／23　　千代田万世会館

「世俗化社会における宗教と葬儀」

講師・・村上興匡（むらかみこうきょう）氏

昭和35年　群馬県高崎市生まれ。39歳。
昭和59年　東京大学文学部宗教学宗教史学卒業。
昭和61年　大学院人文科学研究科宗教学宗教史修士課程修了
平成3年　同　博士課程単位習得　退学
現在　東京大学大学院人文社会系研究科・宗教学研究室助手
職歴　平成3年～4年　日本学術振興会・特別研究員
平成4年～9年　文化庁文化部宗務課専門職員
その他、獨協大学教養部、共立女子大学国際文化学部、明治大学商学部等非常勤講師。
実家は、高崎市内の天台宗慈雲山妙典寺
発表論文・著作等・・一部
『社葬の経営人類学』（中牧弘允編　東方出版刊の中で「社葬とは何か」「社葬はどう展開したか」（山田慎也氏共執）　『葬祭仏教　その歴史と現代的課題（伊藤唯真・藤井正雄編　ノンブル社刊の中で、「葬儀執行者の変遷と死の意味づけの変化」）等々関係各論文多数。

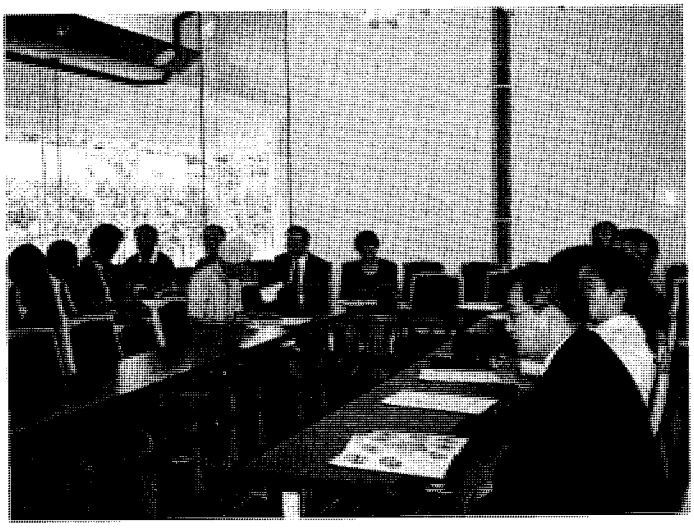
＊本年は伏線として、葬送と宗教などのかかわりを全体の流れとして想定しております。昨年の忘年会以来、新会員となっていただきました村上先生をお迎えして、ご講演をお願いいたしました。
宗教意識の分析や社会科学的な立場からの葬送のあり方と社会でのかかわりなど、統計資料などを交えわかりやすくお話ししていただきました。また、自身の仕事、宗教学研究室の活動や業務内容などもたいへん興味深く拝聴させていただきました。今後も会員としていろいろなご示唆ご協力を仰いでいきたいと思います。

平成12年7月定例会　野外研修会　7／19

「山梨県の葬祭現状を訪ねて」
同時参加として山梨県葬祭業協同組合の皆様との懇談

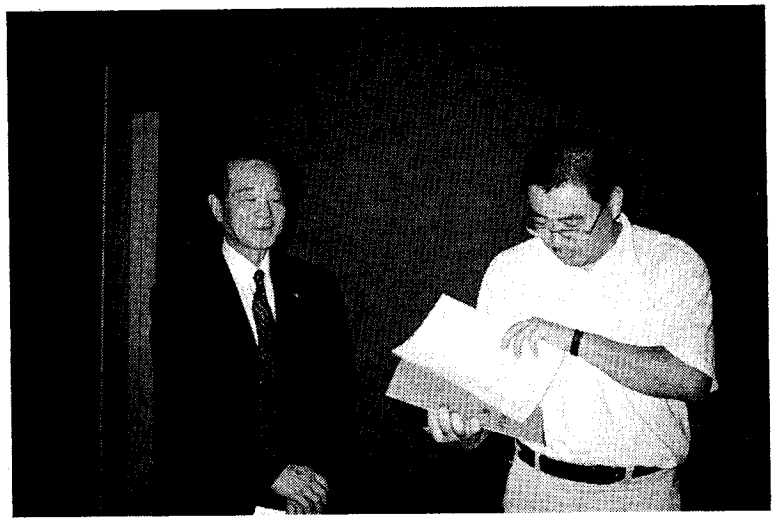
行程　9：10発　高速バス出発
11：00着　富士吉田着マイクロバスに乗り換え
「富士五湖聖苑」見学研修約1時間
途中昼食　山梨名物「ほうとう」
「東八聖苑」見学研修約1時間・・中道町
山梨県立考古学博物館見学　石和にて解散
その後、会員有志にてホテル古柏園にて山梨県葬祭業協同組合の皆様と懇談会・懇親会

＊東八聖苑や博物館では、㈱秋山　秋山秀雄社長（山梨県葬祭業協同組合理事長）にたいへんお世話になりました。また考古学博物館の文化財主事・学芸員の長沢宏昌先生は、日蓮宗の住職でもあり、同館でのご案内や解説がとてもわかりやすく感動いたしました。山梨県の組合の方々との懇談会もたいへん親しく交流をさせていただき、楽しいひとときを過ごさせていただきました。



東八聖苑での研修

考古学博物館で
向って左、山梨葬祭業協同組合理事長の秋山氏
右、学芸員で遠妙寺住職の長沢先生



これまでの活動報告一覧　新体制設立から・・

１９９７

日　時	活　動	内　容	講演者	開催場所	参加人数
２／１０	幹事会	総会の打ち合わせ		東京電機大学	１０名
２／１２	総　会	新旧体制引継		東京電機大学	４５名
３／１４	幹事会	定例会年度計画		東京電機大学	８名
４／１７	定例会	「台湾の葬祭事情」	天野氏	万世会館	５２名
５／２２	幹事会	運営会議		東京電機大学	７名
６／１７	定例会	「県境を越えた火葬場」	浅香氏	東京電機大学	４０名
７／　８	幹事会	講演者事前打ち合わせ		天然寺	４名
７／２２	幹事会	伝通院事前挨拶		伝通院	４名
８／　５	幹事会	運営会議		東京電機大学	７名
８／２１	定例会	斎場見学／			
		「宗教者から見た現代葬儀」	後藤氏	織月会館	５０名
９／２３	研修準備	事務局事前視察・挨拶		沖縄	１名
１０／　４	幹事会	研修旅行打ち合わせ		東京電機大学	８名
１０／１２	沖縄研修				
～１４	定例会	「沖縄の葬祭現状」	仲西氏／城間氏	沖縄残波ロイヤルＨ	１７名
		「琉球文化と葬祭」	親泊氏／比嘉氏	琉球料亭　みらく	２０名
１１／１０	報告会	沖縄研修報告会		東京電機大学	１２名
１２／１０	定例会	「現代墓地霊園事情」	稲村氏	東京電機大学	４０名

１９９８

２／　３	幹事会	総会打ち合わせ		東京電機大学	６名
２／１３	総会／定例会	「葬具とその由来」	山田氏	東京電機大学	３８名
３／　５	幹事会	９８年度企画・活動予定打ち合わせ		東京電機大学	９名

＊オブザーバーでのご参加はのべ２０名くらいになっています。

◆１９９８年度　定例会・懇談会　一覧

日　　時	会合名称	講演／討論テーマ・開催場所・講師
４／１３（月）	懇談会	話題の葬儀について　東京電機大学 ＊会報１号に記載
５／１２（月）	定例会	環境問題と葬祭業界　千代田万世会館 ＊会報１号に記載 講師：荒井保男氏　日本エルツー（株）代表
６／　９（火）	懇談会	葬儀の消費者意識について　東京電機大学
７／１４（火）	野外研修	国立市歴史民俗学博物館場見学　千葉県佐倉 講師：山田慎也氏
９／　９（水）	定例会	中国の葬儀　東京電機大学 講師：八木澤壮一氏
１０／10.11.12 （土・日・月）	研修旅行	東北の葬儀と三内丸山遺跡を訪ねて　青森県 講師：松江葬儀社　松江英寿氏
１１／１１（水）	定例会	葬儀用品の今と昔　東京電機大学 講師：天野　勲氏
１２／１６（水）	懇談会	グリーフ・ワークについて／忘年会　天然寺
９９　1/２６(火)	懇談会 「八木澤研究室卒論発表」	納骨堂墓苑に対する設計者の意識とデザインモチーフについて 八木澤研究室・・加藤　篤　氏 葬送方法と葬儀形態の動向について －新聞死亡記事の分析－　同　研究室・・田中欣也　氏 都心部の寺院墓地及び霊園供給の現状と可能性について 同　研究室・・山口加奈子氏
２／２０（土）	定例会	終末医療とホスピス　東京電機大学 講師：谷　荘吉氏（大阪寝屋川　小松病院院長）
３／２６（金）	定例会	定例総会　東京電機大学

◆１９９９年度　活動一覧

日　時　予　定	会合名称	講演／討論テーマ・講師・・等　予定・案
４／２０（火）	懇談会	拡大幹事会併設 ９９年度「活動計画についての懇談と決定」 東京電機大学
５／２２（土）	野外研修 事前出欠	白木祭壇・葬具類の工房見学　・・・春日部市 「末広製作所」を訊ねて
６／１１（金）	定例会 事前出欠	講演：「墓埋法について」 講師：横田　睦氏　全日本墓苑協会　主任研究員 稲村吉彦氏　　ジャパンセミトリーコンサルタンツ
７／１６（金）	定例会 事前出欠	講演：「ヨーロッパ葬祭現状報告」 講師：八木澤壮一氏　東京電機大学　教授
９／　（　） 日にちは未定	定例会 事前出欠	「インド葬祭報告」（仮題） ・・約１ヶ月に及ぶ調査から・・ 講師：山田慎也氏　歴史民俗博物館　研究員
１０／１３（月） １４（火） １５（水） ２泊３日	研修旅行 事前申し込みと費用入金	「瀬戸内の葬儀事情と新斎場を訪ねて」 岡山県倉敷市（株）いのうえ訪問 講師：井上峰一氏　（株）いのうえ社長 下村　侃氏　　同　儀礼研究所所長 香川県「しずかの里」火葬・斎場見学 案内：八木澤壮一氏　東京電機大学教授
１１／１７（水）	懇談会	「葬儀社ｖｓ付帯関連業者・本音のトーク」（仮題） コーディネータ：杉浦昌則氏　（株）セレマ社長
１２／　３（金）	定例会 忘年会 事前出欠	パネル講演「宗教界と葬祭業界」（仮題） 講師：上村敏文氏・後藤尚孝氏・三浦正信氏（予定） ＊忘年会参加者は会費徴収
２０００ １／２６（水）	懇談会	恒例により研究室卒業予定者の卒論をテーマに プレゼン懇談
２／２１（月）		**拡大幹事会**
３／１３（月）	**特別会**	**「八木澤先生を送る会」に参加**

----平成１２年度活動計画----

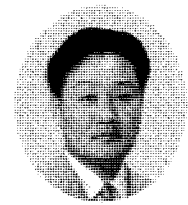
葬文研平成 12 年度活動予定・・・本会報には７月の活動まで報告が記載されています。

月	日	曜日	場　所	タイトル・内容
4 月	21 日	金曜	万世会館	平成１２年度総会　　＊会報３号執筆依頼
5 月	25 日	木曜	万世会館	＊定例会・仮題「宗教と現代葬儀」　北川宏峰氏の講演 宮城県古川市の曹洞宗　龍昌寺住職 兼 葬祭センター ㈱北川 代表取締役
6 月	23 日	金曜	万世会館	＊定例会 東京大学大学院/宗教学研究室 村上興匡氏 講演 テーマ「世俗化社会における宗教と葬儀」
7 月	19 日	水曜	山梨県 富士吉田	＊野外研修会　山梨県葬祭組合との交流懇談会 富士吉田の新設火葬場２箇所見学と山梨の遺跡
~~8 月~~				夏　季　休　会
9 月	4 日	月曜	未定Ｉ	＊懇談会・・パネルディスカッション 上村敏文氏・・ルーテル学院大学講師を中心に。 「葬儀における宗教のふまえ方（仮題）」
10 月	14 日 15 日	土曜 日曜	長野県 山梨県	＊研修懇親旅行　「長野県の葬送文化を訪ねて」 長野県飯田市　株式会社いとう　訪問 伊那・駒ヶ根周辺の初秋と露天風呂　＊会報３号発行予定
11 月	6 日	月曜	万世会館	＊定例会「民間火葬場の経営と苦労」 誠行社　野崎二三子氏 日本大学　浅香教授　㈱和田　和田社長とともに
12 月	4 日 予定	月曜	未定	＊　懇談・忘年会 テーマ「寺と檀家の問題」（仮題）　事務局　二村祐輔
2001 1 月	未定		未定	＊　懇談会　テーマ仮題「宗教者ｖｓ葬儀社」 ＊　または「献体についての懇談」等　　事務局扱い。
2 月	未定		未定	＊　「遺体の取り扱い現状」（仮題） 遺体保存協会
3 月	未定		未定	保留　　1.2.3 月につきましては流動的 幹事会に一任

＊継続留任役員・新幹事・・平成１２年４月定例総会で承認

会長	天野　勲　氏	・・留任
代表幹事	浅香勝輔　氏	・・幹事から代表幹事へ
幹事	杉浦昌則　氏	・・留任・会報編集委員兼務
幹事	勝山宏則　氏	・・留任・会報編集委員兼務
幹事	大杉実生　氏	・・留任・会計委員
幹事	藤井　高　氏	・・留任・会計委員
新幹事	後藤尚孝　氏	・・天然寺住職　浄土宗東京教区　教化団長
新幹事	岩崎孝一　氏	・・㈱吾妻設計　代表取締役
新幹事	大野益満　氏	・・㈱おおの　代表取締役
新幹事	阿島武志　氏	・・㈲一二三
東日本	㈱すがわら葬儀社	
地区幹事		・・留任・菅原氏・世古口氏
西日本	㈱いのうえ	
地区幹事		・・留任・下村氏・清中氏
監査	稲村吉彦　氏	・・留任
監査	杉山昌司　氏	・・留任
顧問	八木澤壮一氏	・・留任（永久会員・・これまで電機大学における葬文研に対するご尽力と共立大学への移籍をお祝いして）
	山床節子　氏	・・留任
事務局	二村祐輔	・・留任

一九九九年葬文研旅行十月十三日・十四日・十五日



浅井　秀明

葬文研の研修旅行は毎回楽しみである。その理由は、旅行にテーマ性（葬送文化研究）がある事と、毎回違った場所に行ける事、そして、地方料理を味わえる事である。自分や家族がプランを立てると当然ながら、楽しむことに主体を置くことになるので、温泉や食事、ホテルの種類、近くにある観光地、子供連れでも面白いアクティビティーのあるところを選ぶことになる。そうすると、自然と似たところを選ぶようになる。ところが、葬文研の旅行は葬送文化研究が前提にあるので、個人で旅行場所として想定しないような場所設定がされる。新しい発見があり、興味のなかったことにも触れることが出来る。そういった意味で、今回の旅行も家族旅行ならメインの観光場所には選ばないであろうチボリ公園・年齢的にもうちょっとしたら行ってもいいかもしれない八十八箇所めぐりを中心に岡山・倉敷の㈱いのうえの井上社長の斎場見学・講演と八木澤教授設計のしずかの里見学・造山古墳見学などを組み合わせた興味深い旅行となった。

待ち合わせは、岡山駅である。そこには、㈱いのうえのマイクロバスが用意されていて、そのまま初めの目的地である造山古墳へと向った。この古墳は、岡山県で第一位、全国で第四番目の規模（３５０メートル、後円部径２００メートル、高さ２４メートル、前方部幅２１５メートル）の前方後円墳で、大正十年（１９２１）、周辺の陪塚（一～六号墳・主に殉じた人の墓）とともに国指定遺跡となったものである。埋葬施設等の詳細は未調査のため不明であるが、墳丘規模、外表施設等の有り様からみて、被葬者は、当地域の首長であったと同時に、吉備全域をも統括していた大首長（天皇に匹敵する勢力を持った人）の地位にあったと考えられるということである。（岡山県教育委員会の案内板から）この古墳の頂上に造山神社がありそこまで十分弱の坂道を歩いて登る。ここが古墳であることは、よほど注意深い人か古墳に興味のある人でないとわからないと思われる。見た目は、小高い丘としか見えないし、案内もほとんどない。というよりは、案内するほどの事がわかっていないといったほうがよいのだろうか。この古墳の案内を郷土史研究家の長谷川先生にしてもらう。そして、バスは、第二の目的地となるエヴァホール倉敷に向った。エヴァホール倉敷は敷地面積約一八〇〇坪で駐車台数三〇〇台という大きな葬祭場である。ここで、㈱いのうえの井上社長の講演を拝聴する。井上社長は、昭和二二年生まれの五〇歳で創業三代目、二六年前に社員４名、月十二件ほどの施工をこなす葬儀社を受け継ぐ。花園大学初代応援団長で僧籍も持っているということである。現在、㈱いのうえは、グループ総葬儀件数二一〇〇件、グループ総売上五十億円（仏壇、墓石含む）ということである。エヴァホール倉敷のあとに近くにある㈱いのうえの仏壇部にあたるほうりんを見学し、宿泊先の倉敷国際ホテルに向い、チェックインする。そこから歩いて、チボリ公園内にあるデンマークハウスでバイキングスタイルの懇親会を催しながら儀礼文化研究所・下村さんより岡山四方山話を聞く。懇親会のあとチボリ公園を五十嵐さん・大野さん・世古口さんと散策する。雰囲気自体はいいが、お客さんが少ないのが気になる。思うに入場料を取っているので地元のお客は来にくいし、規模からいって県外のお客さんを呼べそうにない中途半端なテーマパークである。ちなみに、デンマークにある本当のチボリ公園は、アンデルセンも遊んでいたという大きな公園である。思い切

って、入場料無料にして飲食の持込だけを不可にするとか常時入場者がいる状態にしないと経営的にむずかしいのではないかと思った。その代わりに、販売に力を入れもっとたくさんのものが売れるスペースを作るべきである。試しに、ウォータースライダーに乗ってみると結構面白かった。倉敷駅のまん前で立地は抜群であるので街が活性化するような施設になることを期待する。

二日目は、倉敷から四国に渡る瀬戸大橋に向った。瀬戸大橋中間点の与島・休憩所においてヘリコプターでの遊覧飛行に挑戦する。値段は、意外に安く、五千円程度である。ヘリコプターの機種は、フランス製ジェットヘリ・エキュレーユである。爆音とともに飛び立ちあっという間に四国本州間を横断する。ヘリコプターによる飛行は、（ホバリング）浮遊感覚があるため、旅客機とも小型飛行機とも全く違った感覚がある。バスは、二日目の一番目の目的地屋島国立公園へと向う。ちょうど昼食の時間と重なるので屋島ドライブウエイ入り口の讃岐うどん・わら家に入ってうどんを注文する。ここは、有名な店らしくお遍路さんがたくさん食事をしている。もちろんお遍路さんの目的は、屋島国立公園内にある屋島寺に札をかけることであるが。札は、始めの七回までは白でその後二十回までが赤、五十回以下が銀、それ以上は金の札になるという。どなたかの言葉を借りると非常にうまい集客方法であるといえる。大概は、一回どおり回るとよいと思うだろうが、何年かたつとまた、遍路したくなるのであろうか。集客の成功例の最たるところといっていいと思う。ここのうどんは、当然讃岐風であるが、甘味の少ないからめのタレに葱と生姜をすって入れる。メニュー数は少ないが、ほとんどの人は、ざるうどんか釜揚げうどんを注文していた。腰はあるがやわらかめの麺であった。屋島寺は、四国八十八霊場の八十四番目に位置する寺で唐僧鑑真と弟子の空鉢によって建てられた。空鉢が初代住職。その後、弘法大師空海によって律宗から真言宗の寺となる。屋島国立公園は、風化しやすい花崗岩の上を讃岐岩質安山岩が水平に被っているために変わった形状になっている。ここは、源平合戦の合戦場となった壇ノ浦を初めいろいろな史跡がある。血の池などもそのひとつで源氏の兵士が刀の血を洗ったところそれから赤くなったとも言い伝えられている。ここでの、楽しみのひとつにかわら投げがあげられる。皿状のかわらを屋島の風景に向って投げつけるもので、家族の安全や健康その他を祈って投げるかわら投げは、爽快である。そのあと、今回の目だまである長尾・しずかの里の見学へと移っていく。しずかの里は、当葬送文化研究会の発起人で顧問の八木澤教授設計による火葬場である。小高い丘の頂上に位置し自然との一体感を重視した設計になっており、火葬場には見えないようなモダンな概観である。斎場は、祭壇を飾る必要がないようにガラス越しの中庭を配している。開放感のある斎場で、八木澤教授の説明を聞く。この斎場を後にして罰当りかもしれないが、八十八の霊場最後の寺、大窪寺だけを覗いて宿泊先である琴平リバーサイドホテルに向った。このホテルと姉妹ホテル琴参閣の若女将さんは、残念ながら実物には会えなかったがポスターで見る限りここら変では一番美人の女将だった。ここは、金刀比羅宮で有名なところで、歩いてすぐのところから石段が始っている。町も、金毘羅さん中心に出来ている寺町といった感じである。石段が１３６８段もあり、一時間三十分程かけて頂上を目指す。この夜は、頂上征服はあきらめて、琴参閣の元湯で汗を流し、懇親会のビールで明日の英気を養う。琴平（四国）で気になるのは、うどんの安さで、二百円二百五十円程度である。さすが、うどんの本場といった感じである。

次の日は、朝六時に集合して金毘羅宮を目指した。肌寒い気候であるが、百メートルも歩くと熱くなってきて、三分の一も登ったころには、汗だくになっていた。これが頂上かと思うと横に階段がありなかなか頂上には達しない。中腹の７８５段のところにある本宮まで参拝して頂上の奥社は断

念する。中腹ではあるが本宮の境内から見る景色は、爽快であった。この金刀比羅宮は、こんぴらさんの名で親しまれる商売繁盛の神様である。

この日は、金毘羅さんに登る人、そのまま帰る人、㈱たるい・樽井社長の新斎場を見学する人に分かれた。自由解散の形だ。樽井社長の新斎場は、すでに見学済みであったので私は、高松港から船で小豆島に渡り、観光して姫路経由で帰ることにする。高松には、ことひら駅から琴平電鉄で行くコースを選択した。ところが、高松につくと船の時間が合わないことがわかり坂出に行きそこから電車で岡山まで行き、またそこから新幹線で浜松まで戻ることになった。とんだ遠回りになったが旅の醍醐味を満喫して、満足な旅行となった。

㈱出雲殿

葬送文化 雑感（最近おもうことあれこれ）

下村 侃

世紀末年といわれている今年の六月という月は、私達日本人すべての人が身近に知っている人々の訃報があった。小渕前総理、梶山さん、竹下さん、そして皇室では、皇太后さまのご逝去である。

これらの人々の訃報に接し、今さらながら人間のはかなさ、うつろい、諸行無常という切実な実感をおぼえたのは私一人ではないと思う。

葬送文化研究会、会員の一人として、人間の死＝葬＝宗教という文化について考究することの意義を深く再認識するものである。

さて、私は本年五月、ある大学の同窓会で公開講演会があるというので拝聴した。この講演会のメインは、京都の花園大学学長の河野太通老師（臨済宗・神戸 福寺僧堂師家）の「祈りの実践」という命題であった。

冒頭、考師は弘法大師の秘蔵宝鑰の一節を採り上げ語られた。曰く。三界の驕人驕せることを知らず。四生の妄者妄せることを知らず。生まれ、生まれ、生まれて生の初めに暗く、死に死に死んでも死の終りに暗し。と嘆かれた。三界とは我々が生きているこの世界のこと。この世界に住む人々は奢り高ぶっていながらそれに気づいていない。そして四生、つまり生きとし生けるものは、皆この世界の真実に疎いのに自分が疎いことを自覚していない。このような状況で人類がこの世界に発生した四、五〇〇万年前から今日まで、膨大な数の人間が生まれては死に、死んでは生まれてきた。

しかし、生とは何か。死とは何かということがはっきりつかまれていないままであると。私はこの話をきいて私の心の内奥をゆさぶるものを感じた。〝葬〟は宗教というものの原点であり〝葬〟は死によって始めていとなまれる文化である。それは人間讃歌であり、人間をこよなく悼み、現に生きる人々に夢と希望をもたらす行為行動であると思う。

河野老師は、平成七年一月に発生した阪神大震災で、人間がつくってきたものや、人間の命がいかに儚いものかを体験された。火葬場がいっぱいで、多くの遺体が寺に運ばれたそうである。父母兄弟が亡くなり、取り残された多くの孤子たち。この子らの心の支えにと、焼け跡の土を集めて供養のためのお地蔵さんをつくり〝やすらぎ地蔵〟と名付けて持たせているとのこと。地元陶芸家たちの協力で輪が広がり六六〇〇体ほどのお地蔵さんが全国で祠られている。

仏の大いなる心を思った。

さて現代の葬儀を思うとき、ご遺体の保管は主にドライアイスや、アメリカではエンバーミングが施され処理されているのだが、昔はどのようにされていたのか。ふと思う。

その多くは自然葬であった。風葬（風化）や水葬そして土葬、火葬となるのだが。火葬は文化葬といわれる。

遺体浄化のために埋墓がつくられ、肉体の浄化と遺体に残っているとされた荒魂の鎮魂のための殯（もがり）敛儀礼がおこなわれたのである。したがって殯は自然葬法であろう。そして殯儀礼の中核となるものは死者の霊魂が、いわゆる荒魂であることの鎮魂儀礼にあった。殯儀礼の祭祀では宴楽にともなって芸能も催され、これも鎮魂の為の重要な行事であった。日本葬制の出発はこの殯儀礼が原初であり、その特質は呪術と諸儀礼であり、現代まで受け継がれている葬送文化の原点なのである。

葬儀業界との出会い

杉浦　昌則

私が葬儀業界に身を転じたのは、昭和四十七年二十六歳の時だった。まだ新婚一年ちょっとだったが、すでに長男は生まれていた。

それまでは婦人服メーカーの営業マンとして、ときにはデパートの売場にも立ち、服装といえば、当時流行していた原色のカラーシャツや、花柄などのプリントシャツに身を包み、安月給のわりには身なりに金のかかる職場であった。数百名の社員を要する会社だったが、役員からして堂々とピンクのワイシャツ姿で出勤して来る。女の子といえば踵まで丈のあるマキシのロングスカートや、逆にお尻の出そうな豹柄のホットパンツなど穿いて社内を闊歩している。そんな空気の中から抜け出て、当時浅草にあった祭壇・仏具の卸商に飛び込んだわけだったが、最初は全く異次元の世界にやって来たような気がした。

そこの会社に入った途端に感じた色彩と匂いに、当初なかなか馴染めないでいた。

檜材や線香の香、それに梱包材の藁の匂いが重なってくる。檜も僅かであればリラクゼーションの香だが、祭壇に埋もれてみれば、それは目に染みるほどの刺激でしかない。そして当時は蓮華や四ケ花など、いかにも葬式を彷彿させる小道具のかずかず。

私に与えられた制服は、全然ファッショナブルでない、コゲ茶の上着。その下に私が着込んでいるのは、それしか持っていない原色のカラーシャツ。

私も困ったが、同僚からも「ピンク」などとあだ名をつけられていた。上司は縮みのシャツに雪駄ばき。同僚には、ランニングシャツに毛糸の腹巻の出で立ちで、営業に出る者もいた。でも今思えば、とてもいい時代に思えて懐かしい。

浅草三社祭りが始れば、社員全員仕事をほっぽって神輿を担ぎにいく。神輿を担げば会社も出勤扱いなのである。

ファッションメーカーで働いていた時、私の友人が「韓国と仏具の貿易をやる会社を始めるから、一緒に参加しないか。」との話を持ち掛けられた。

私は「貿易」という二文字に魅せられて、悩んだ末にこの業界に転身した。なにしろ貿易会社を立ち上げるわけだから、ＬＣの組み方などいろいろ勉強を始めたのだが、現実は業界を識るためにという口実で前段の企業に、なかば騙されて連れて行かれたようなものだ。貿易会社の方は半年も持たずに解散した。

私は昭和三十八年に祖父を、四十年に母を、そして四十三年には祖母を亡くし、相次いで家族の葬儀を経験していたから、葬儀そのものには、全然抵抗がなかった。

当時の葬儀社も、まだ商人としての昔日の面影が濃く残されていて、何かを配達に行くと、茶ダンスからピースだのハイライトを出してよこしてくれたりしてくれた。

ときどき会社に、神田の方から、位牌だの提灯だの取りに来るかわいい兄ちゃんがいた。それが今、葬文研の事務局をやっている二村佑輔氏である。

当時は、東京近郊でも土葬がまだかなり行われていた。私がいろいろ物を売った記憶の中に、手引きの霊柩車というのがある。たしか伊勢原市の農協だったと思うが、リヤカーに宮型の霊柩車を乗せたような物である。こ

こにご遺体を乗せて人力で墓地に運ぶのである。又、一番儲からなかった仕事は花環の芯を売った時である。直径四尺から六尺の輪で、麦藁で造られていて、ここにテープを巻き造花や矢羽根を差していく。当時は茨城県の結城市辺りで生産されていたが、二トン車に入りきれるだけ持って来いという注文に大きな商売になるはずが、あまりの単価の安さを知らず、ガソリン代にもならなかった。

長崎県の壱岐では、葬儀社の店の土間にコゲ茶色の大きなカメが置いてあった。

店の親父さんに「これ何に使うんですか?」と聞いたところ、ここに死体を入れて土中に埋めるのだそうだ。カメを上から覗いて見たが、随分狭そうだ。どうやって入れるのか聞いたところ、体を屈折させて尻からトンと落とすのだそうだ。本州では屈伸して寝棺に納まるが、その方が楽でいいと思った。当時から九州、沖縄では半寝棺というか、上体は伸ばして、足を屈折した姿勢で納棺していた。だから棺のサイズも高さがあり全体の寸法が短い。人間が死んでも、二十四時間以内なら蘇生することがあるという。だから火葬する場合にも、その時間を経過しなければ焼けないことになっているはずだ。

明治の記録によると、確かな数字は忘れたが蘇生率は一〇〇〇分の三くらいのかなり高い確立だったように記憶している。もっとも、せっかく蘇生しても又、すぐに死んでしまうことも多いそうだが。当時は、死体に酢や焼酎を抱かせていたようだから、そういう現象も稀にあったろうが、現代ではドライアイスによって凍らされ、酸欠し蘇生は一〇〇パーセント無理な状況となっている。内緒話ですが、もしあなたが最愛の人を亡くしたら、そのまま布団に寝かせて生き返ることを祈った方がよい。憎たらしい亭主だったりしたら、即ドライアイスを入れること。お通夜とはもともと蘇生を待つためのものであったらしい。ご馳走をそろえ、酒をふるまい「こんなに楽しいのだから、早く起きて来なさい。」とのことで、まだ寝ている状況の中で、本来喪服は着てはいけない。お坊さんも墨染めの衣などで枕経を唱える。ところが朝までたっても起き上がらなければ、初めて諦めて葬儀の準備に掛かるわけだ。葬儀では僧侶も袈裟をつけ正装で読経が始る。ところが沖縄では、死ぬとすぐ火葬してしまっていた。現地の葬儀社に法律はどうなっているのか聞いたところ、そんなきまりは聞いた事がないと言う。アメリカから本土復帰してまだ間もないころだから、規制もかなりゆるやかであったと思う。沖縄では当時男は力仕事のみで、店のきりもりは殆ど女性が担っていた。店先でどんぶりに入れた氷をふるまわれ、それをシャキシャキ食べながら、お内儀さんの花環造りを眺めている。麦藁の代わりにビンロウの葉を輪に造り、そこに造花を差していく。殆どクーラーなんかお目にかからず、座っているだけで汗が吹き出す。日盛りの街を歩けば、ベルトのバックルが火傷するほど熱くなる。この暑さなら遺体だってみるみる腐ってしまうに違いない。

ある日、沖縄の火葬場に、骨ガメを買ってもらおうと立ち寄った。

門の外に車を停めて、火葬場の構内を革靴でシャリシャリ音をさせながら歩いて行く。

敷き詰められた白く粗い砂を見て、さすが南国だ珊瑚が敷いてあると思い、喜んだ。

それを火葬場の職員に伝えたら、なんとそれは人骨だった。骨ガメはごく小さいものに収めて、あとはその辺に撒いたりしているとのこと、水捌けがとてもいいそうだ。見ず知らずの人の骨を踏ん付けて、なにか死者に対し申し訳ないような気分で、そして車に乗る前にやっぱり気持ち悪くて、靴やズボンの裾に埃のように積もった白い粉をしつこいくらいに叩き落とした。空はジリジリと太陽が焼け、遠くに青すぎるほどの紺青の海がたゆたう、琉球蝉がかしましい夏の風景であった。

今、葬儀業界も大きく様変わりして、葬儀だけでは勿論なくて世の中全体が、心や魂を置き去りにして何もかもが進められて行く。日本では、アメリカの葬儀の数倍の費用が掛かるとされるが、アジアではもともと死者や祖先を大切にする習慣が根強い。儀式の上で不必要なものは淘汰されても良いが、手厚く弔うことがなおざりにされれば、生きていく者の人心も必ず荒廃していくに違いない。「死を知らざるものは、生を知らざるなり。」と古いチベットの教典に記されているそうだ。私も葬文研の諸先輩の方々に、更に教えを請い、良識に基づいた葬儀の在り方を、仕事の上で今後とも大いに生かせたら良いと考えます。

サービス業の生命線

木野島　光美

グランディメモリーも早いもので社を立ち上げて四年目を迎えました。これも皆様のご愛顧のたまものと感謝しております。また、葬文研様にこうして原稿を書かせていただくこととなり、たいへん感謝しております。

弊社では葬儀現場への人材派遣とプランニングをお手伝いさせていただいております。これまでのサポート数を合わせますと、約七千件に及ぶ喪家のお手伝いをさせていただいたことになります。弊社にとりまして、お客様とは、クライアントの葬儀社様はもちろんのこと、ご遺族・ご会葬者、さらにお花屋さん、お料理屋さん、ギフト屋さんの皆様であり、ありがたいことに実にさまざまな場所と状況の中、経験を積ませていただいております。

葬儀は、準備期間がない中で、「無」から「有」を生み出さねばならない究極のサービス業です。いかにすれば、お客様に喜んでいただけるか…弊社でも日々試行錯誤の連続ですが、その中で最も細心の注意を払っていること…それが、「クレーム処理」です。

ところで、ホテルオークラと帝国ホテルは日本で最もクレームの多いホテルだそうです。えっ?あの国際的に有名なホテルが…と思われるでしょう。

クレームをつけるということは、たいへんエネルギーがいることです。上記のホテルは、クレームをつけるお客様というのは、このホテルにまた滞在したいから、また、このホテルで食事をしたいから、サービスに長けたスタッフとまた話がしたい…このホテルをもっとよくしたいからと思っていらっしゃるから、疑問や不満をぶつけてこられるのだとポジティブにとらえ、改善策を模索し、実行にうつした結果、常にホテル業界のトップクラスを走りつづけています。

不満があっても何も言わず、二度と来ないお客様の方が恐ろしいのは言うまでもありません。感動を受けたことや関心したことより、人は腹立たしく思ったこと、不満に思ったことを他人に言いたくなるものです。口コミは、サービス業にとっては生命線ではないでしょうか。企業としての生命線を絶ってしまうか、より頑丈なものにするかは、現場でのスタッフの一挙手一投足にかかっているといっても過言ではありません。

弊社では、数年前、葬儀業界に新規参入するという某企業から依頼を受け、「クレーム・マニュアル」を作成しました。喪家から無理難題を言われた際の受け答え方や会葬者からクレームをつけられそうになった際の回避法など、通夜から告別式、初七日に至るまで各場面を想定してのクレーム対策及び受け答えのマニュアルです。

具体的には、会葬者から焼香誘導が遅いとクレームがついた際の対処法、従業員の態度が悪いと言われた際の対応、ほろ酔い気分の会葬者から女性社員が食事を誘われた際のソフトな断り方など内容は多岐にわたっています。

今後、葬儀業界はさらなる競争激化が予想されます。勝ち組みとなるためには資本力も大切でしょう。しかし、葬祭ホールの建設ラッシュの中、経営的側面から成功に転じた会社は果たして何社あるでしょうか。また、葬儀単価が安いだけでお客様は本当に満足されるものなのでしょうか。

ホテル同様、サービス業の最前線をゆく葬儀業界に対してもお客様は、価格設定とそのサービス内容、人材の質に対して更にシビアになっていくものと思われます。営業サイドや現場サイドで発生した、お客様のご要望やクレームをトップがどう吸い上げ、改善策までもっていくか…フットワークの軽さと柔軟性、感性がお客様から問われているゆおな気が致します。私ども業界クレームワーストワンでは困りますが、クレームをお客様からのアドバイスととらえ、弊社のファンになっていただけるよう感性を磨いてまいりたいと思います。ピンチをもチャンスに変える企業体質作りを目指してまいります。

今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い致します。
ご高覧、誠にありがとうございました。

㈱グランディメモリー

四国研修旅行

田中　のり子

私が㈱セレマの杉浦社長さんより、この葬文研の話を伺い興味を感じたのは葬儀業社の方々が、それぞれ営利目的とする単なる名刺交換の場ではなく、それに関わる巾広い分野の皆様が、古来よりの伝統を重んじながら、現代から未来に向けて移行する「儀式」を探求する「会」と受けとめたからである。入会当初、会長さんより司会者としては実りのない会かもしれない…と言われたのを憶えている。定例会等のわずかな時間の交流の中に何かしら得る物がある。研究旅行も「沖縄・岡山・四国」の旅もそれぞれに有意義であったが、特に四国巡りが印象深く心に刻まれている。「四国霊場八十八番、医王山大窪寺」に着き、バスを降りると同時に売店の人が「おつかれ様でした、お接待です。このお豆さん食べて疲れをとって下さい」と大粒の甘納豆を手の掌にのせてくれた。それは試食品で帰りに売店で勧められたが「お接待」という言葉に何故か心が和んだのである。それは最初から美味しいから帰りに買ってほしいと言われるよりも、その気持を表には出さずに労いの心で参拝者を持て成していたからである。「四国巡礼の旅」は宗教心の強い人や時間的にゆとりのある人が行くと思っていたが、そうとは限らないと言う。生活に疲れた人、心に病を持つ人が拠り所を求め、中には道中、食さず、少しの水だけで、己を極限に置き、無にして霊場を巡り、生きる支えを見い出そうとしている人がいるという。その人達を接待宿として設け、少しでも支えになろうとして下さる、地元の方々の温もりがあるお接待!!ある会社の要職にいた人が突然の解雇を受け先づは歩いて心の整理をしてから、今後のことを考えようと旅に出たという、四十代の男性、そして少し離れたところに休暇を利用して寝袋を背に野宿をして旅をしている二十代の若者が手を合わせていた。

日頃、神仏への信仰とは無縁の人達が、旅では表現出来ない何かを各霊場を一歩一歩ふみしめながら求めている。その苦悩の中に大なり小なりの何かを見い出した時は感動に値し、大きな心の糧となるのではないでしょうか?接待をする側、受ける側、双方が互いに無の心で接し長年一緒に住んでいる家族の様に心を通わす事が出来るのは、すばらしい事だと思う。参拝者の中には、観光客だけではなく巡礼の旅の真髄を学ぶことが出来た中に痛切に感じだのは、この業界に関わり十二年になるが、数々の知識を得たことに併せて、いつしか悲しみに慣れてしまっている様に思えた。当初の一現場、一現場を省みながら、司会者としての階段をもう一度登りたいと願っている。確かに司会業として、直接の「利」にならないかも知れないが、いつも会員の皆様の大きな輪の中に、私自身を置くことが出来て、ある日…あの時のことが…と間接的な勉強になっている…。葬文研です。

㈲田中事務所

「葬文研によせて」

世古口 治子

皆様初めまして、実は私入社致しましてわずか一年数ヶ月です。ですから葬文研の会合の末席に加えて頂きまして未だ数回ですが、毎回、会員の皆様方或いは講師の方のご意見に一々「なるほど」と感嘆と驚きと羨望の思いをもって拝聴しつつ、一つでも多くの事を吸収したいと心掛けている次第です。

このような私が「葬送」―辞書で調べましたら、死者をほうむるのを見送ること、とありました―というものを考えた時、頭に浮かぶのは「故人或いは自分が死後の世界で苦しまず成仏するように送ってやる儀式」というくらいの知識しか持ち合せておりません。

しかし、最近よく取り沙汰されます様に選択の幅が広がり宗教観が希薄になってきています。「これで良いのだろうか?」と勿論皆様もお考えのことと思いますし、葬送業を生業とする者としてだけではなく、子供達を育てる親として憂いを禁じ得ません。

未熟者の発言と大目にみて頂ければ幸いですが、宗教家の方々にはもっとご協力頂ければ―当然我々葬祭業者も一人一人における知識向上が必要であり、それを伝える窓口となることが先決ですが―まだまだ右往左往してマスコミに流されているだけかもしれない消費者の方々に正しい選択をして頂けるように思えます。今、「葬送」に関する正しい歴史並びに自然・先祖・両親に対する感謝の大切さを伝えていかないと今後益々殺伐とした世の中になってしまいそうな状況であり、微力ながら何とかせねばと考えている一員であります。

最後に最近の天声人語で大変印象に残っている記事がありますのでご紹介致します。

ブラジルの先住民族のとある部族の言葉には、過去形も未来形なく、現在形しかない。昨日を悔い、明日を憂うということがない。すべてが「いま」に集約され、密度の濃い時間が流れる。又、泣く、笑う、怒るといった感情表現は豊かだが、幸せとか不幸とか寂しいといったややこしい概念は存在しない。一方で、大人になるための通過儀礼は厳しい。少女は隔離された暗い部屋に約一年こもる。だれとも口をきかず、自分と向き合う。少年は呪術師の調合した毒を飲む。肉体の限界を試し、死と向き合う。カネと時間に振り回され、自分とも死とも対話をしない日本人と比べ、遅れているのはどちらか…（朝日新聞六月十一日付け『アマゾン、インディオからの伝言』南研子著 ほんの木 から）

これは勿論考えるまでも無く、（見掛けだけの）文明人といわれる我々が大切なものを自ら捨て、自分で自分の首を絞めるようになってしまったと考えざるを得ません。

人間の本質、我々の遠く昔の祖先は彼等のようだったのではないでしょうか。文明は無くても（何を分明というかは疑問ですが）常に「生と死」に命懸けで向き合っている彼等が実は本当の文明を持っていると言えるのではないでしょうか。

安易に彼等を羨むのは早計ですが、何かの手掛かりになるような気がしてご紹介させて頂きました。

末筆になりますが、前述のように未熟者の私を暖かく迎え入れて下さる天野会長を始め諸先輩方の皆様に感謝申し上げると共に、広い心で勉強の

機会を与えて下さる弊社の上司に感謝の意を表しつたない私の寄稿とさせて頂きます。

今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りたく何卒宜しくお願い申し上げます。

「生命（いのち）の物語」応援会社
㈱すがわら葬儀社　営業企画室

未来に！！

阿島　武志

初めに、私、阿島武志は葬祭業の仕事について三年、葬文研の会員になって一年たらずの二十三歳の若輩者です。こんな私に会報を書く機会をくださった事、また今期より幹事という大切な職に就かせて頂きました事を天野会長はじめ葬文研会員の皆様方に、お礼を申し上げます。

私が初めて葬文研に参加させて頂いたのは一年前の事です。これまでの葬文研の経緯を知り、実際に定例会に出席させて頂き講師の方のお話を聞いたり、会員の方々とお話させて頂きました。皆さん大変「葬送文化」に対し研究熱心であり、色々な事を知っている方々が大勢おられると思いました。その様な皆さんと自分を比較すると、本当に自分は無知であったなと思いました。そして日々やっている葬祭業務に対し、何の意味も考えずに行ってきたのではないかと、考えさせられました。このことは当社自体にも言える事で、葬儀式を業としている会社として真剣に「葬送文化」を考えてきただろうかと思いました。例を上げてみると、「なぜ幕を張るのか？」「なぜ祭壇を飾るのか？」などの意味や、各地方ごとに伝わる葬儀の仕来り、葬儀の時に使われる葬具等の使われ始めた理由など、葬送に関わるすべての事を明確に自信をもって説明できるかとなると、当社としても私も応える自信ありません。これは葬儀式を業としているにも関らず「葬送文化」について真剣に考えておらず、疑問に対しても昔からやっていたことだからとか、周りでやっているからと、あいまいな認識だけで日々の業務を行い明確な答えを出す必要性を軽視ていた表れだと思います。この様では葬儀式を業としている当社も、社員としての自分も、恥ずべき事だと思います。我々葬儀式を業とする者が、古来から伝わる「葬送文化」を軽視していては、各地域に残る日本の素晴らしい「葬送文化」を未来に伝え残して行く事が、出来なくなってしまうのではないでしょうか。

何故ならば、各地域の文化の一部として、人々によって受けつがれてきた「葬送文化」は、現在の様に核家族化が進み地域とのコミュニケーションが薄れていく中で、未来の人々へ伝えにくくなっています。この文化を未来に残していくには、葬儀式を業としている我々葬祭業者が、宗旨・宗派にとらわれず古来から伝わる「葬送文化」を研究し、正しい知識を身に付けていかなければならないと思います。そしてこのことは、葬祭業者としても他社との知識の差別化になると思いますし、何よりも消費者の皆様に、正しい葬送の知識を自信を持って伝えさせて頂けることにより、実際の葬儀の現場で「葬送文化」を残し、未来に伝えて行ける事が出来ると確信するからです。また、葬祭業者として、信頼感や安心感を得てもらう事ができ、地域社会・消費者の皆様にとって、存在価値があり、必要とされる会社であると認めてもらえることに繋がっていくと思います。

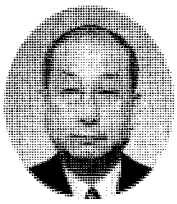
以前より「葬送文化」を非常に大切と感じ、真剣に研究なさっている葬祭業者の方々は、大勢おられると思います。遅れ馳せながら、それに気づいた私であり当社であります。こんな未熟な会社であり、未熟な私でありますが「葬送文化」を真剣に考え学ぶことにより、葬祭業者として地域の消費者の皆様に、より良い形で葬儀式をご提供させていただきたいと思っております。

葬祭業社の一員として、歩き始めたばかりの若い私でありますが、未来の当社、未来の私自信の為に天野会長はじめ、葬文研の諸先輩の方々から

は、まだまだ学びたい事が山の様にあります。どうぞこれからもご指導頂きますよう、お願い致します。

㈲一二三

葬儀を思う



後藤　尚孝

葬送文化研究会も長いこと存続していますね。私は、たまに出席させて頂いている身で、大変恐縮しています。初めに天野会長よりお誘いを受けて、今日に及んでいますが、葬儀社の方々が、いつも熱心に研修されていることに敬意を表しています。

はじめは、利潤追求のための研究会ではないのかと疑心暗鬼でしたが、入会してみるとそれどころか、葬送文化論の出版を考え、東京電気大学の八木沢教授、日本大学の浅香教授と言った方々の御指導による研究会を目のあたりに見て、当時感伏したものでした。会のさらなる発展を期待したいものであります。

さて、二十一世紀は心の時代と言われる中で、若い世代の宗教的無関心はいなめず、また、寺院離れも見られ、凶悪な犯罪や家族の崩壊など、心の危機が、深刻な課題として、我々僧侶に突きつけられています。

同様に、葬儀に於いても、心離れが見られ、深刻な時代を迎えていると思われます。その原因として考えられることは、封建社会の家族制度が崩壊し、親族の結束が薄くなり、親戚相互で助け合った葬儀が消え、遺体の処置は、病院側と葬儀社の連携によって旅支度等々がなされ、遺族当事者は、葬儀社の指示を待って、その間は遺体を見守っているだけといった時代を迎えているのです。

今日、バブル崩壊によって、リストラ等による経済的に苦しい時代を迎え、葬儀を質素に執り行ったり、または、お経はあげず火葬にし、四十九日忌を待って納骨の時に初めてお経をあげるといった人たちも多く見られるようになっています。

今後の葬儀の在り方を考えると、暫くは高齢化社会に於いて増加が見られますが、その後は、子供の少子化が、葬儀を大きく左右するのではないかと思われます。いづれ、二、三十年すると、夫婦二組の両親のお墓を守る時代がやって来るのではないかと想像されるのです。

また、これからの葬儀は、今までの様な画一的な葬儀形式では、大衆はものたりなくなり、その傾向が、今日の葬儀離れの一因となりつつあります。封建社会以降今日まで、そのなごりと共に多くは仏教信仰を基本として、親戚や世間に対しての義理や体裁を縁として、今日まで続いて来たのではないでしょうか。

しかし、これからの葬儀は、価値観の違い・個人の尊重と言われ、異なった形式の葬儀が増え、経済的な面からも、ますます内々の葬儀となって行く傾向にあろうと思われます。

最後に、葬儀社に対して提言を行い終わりにしたいと思います。

一つには、葬儀業組合が老人に対するボランティア活動を進めて頂きたいと思うのです。高齢化社会に向けて、奉仕活動の精神を学んで行く時代が到来しているのではないでしょうか。

二つには、僧侶に対しては、和尚さん、お坊さん、方丈さん、院主さん、庵主さん等、様々な呼び方があると思いますが、先生と言われるよりは一般的に、住職さんと呼ばれた方が、馴染み深く感じられます。

最後に、業者が葬儀場を借用する際に、葬儀・式場申込書（以下の表）を葬儀場に提出されると、式場側は何かと便利かと思われます。以上実行されるようお願い申し上げます。

「寺請け制度」はもういらない！

寺壇関係の崩壊

二村　祐輔

日本は不思議な国である。

海をこえて押しよせる文明や文化に、これまで多大な影響を受けてきた。けれどもその波に呑み込まれてしまうのではなく、いつの世も何となく都合のよい部分のみを、適宜受け入れて独自のしつらえを施し、それを加工した。

キリスト教は「宗教」として、受け入れられたのか

一五四九年我が国にキリスト教がもたらされ、地域的な布教がはじまった。しかしながらそれが全土的に至らなかった背景のひとつには、それまでに築かれた厚い習俗の壁が基幹をなしていたものと分析できる。幕政の施策からながらく禁教の期間をとりはしたが、近代、明治の世にそれも取り払われ、内村鑑三のような深遠なキリスト者も誕生した。その思想や精神は、西欧文明を礼賛するなかで、博愛的な面において受け入れられていくのである。にもかかわらず、逆に近代日本は時代と逆行するような「神国」としての国づくりを始めたのである。

つらねて、世界大戦後のアメリカ支配の中、精神的な白紙状態を迎え、思想の転換とともに「神国から人間の国」になった。ここでもキリスト教の布教は、再び大きなチャンスに恵まれたのである。ではその結果が現在に至って反映されているかといえば、決してそうではない。

お隣の韓国を含め東南アジア諸国においては、キリスト教の布教施策に準じて、かなりの成功をおさめたといってよい。しかしながら日本での布教は、現状において失敗であることを認めざるを得ないだろう。これはキリスト教の普及経緯の中でも特異な例であるに違いない。

たしかに、クリスマスは何となく日本の「年中行事化」している。バレンタインデーの慣わしも、今の若者だけでなく私たちの世代にとっても、一喜一憂の気になる日だ。もちろん商業的な煽動を踏まえて、それに誘導されたことを差し引いても、そういう時期になれば何となく季節の風物として自然にとらえてしまう。そういう感覚が定着した。

また結婚式でさえ「洗礼」に関係なく、何となくそのファッション性から、教会やチャペルを模倣したような式場で挙げるカップルが多いのは周知の事実である。

西暦、つまりキリスト教暦を日常に使用し、安息日である日曜日には休み、述べたような慣らわしをしていることを概観すれば、日本が「キリスト教国」に違いないと、他国の人から見て勘違いされても無理はない。

つまりルーテル学院大学の上村先生が平成十一年の十二月定例会・忘年会でパネラーのお一人としておっしゃったように、「宗教としての『布教は失敗』したもののキリスト教の「文化」は、いつのまにか日本の現代的『習俗』として、すっかり定着してしまったことは事実としてとらえておく必要がある。」確かにそう思う。

ここが不思議なところではないだろうか。宗教的なものを「利用」する知恵、そういったものが、私たちには潜在的にあるのかもしれない。

「宗教」を利用する知恵

誕生のお参りは神社で。婚儀はキリスト教式。そしてお葬式は仏教で。そんな日常を、私たちは何の違和感もなく過している。これが日本人の宗教観だとしたら、何と節操のない民族であろうかと思われてもしかたがない。では果たしてそういった行いを私たちは「宗教」として意識し、執り行っているのだろうか？

大半の日本人は、「私は無宗教です。」と平気で口にする。たしかに特定の宗教を熱心に固持している人は少ない。あるとすれば新興宗教のたぐいが多いのも現代である。

私たちの考える「宗教」とは、キリスト教やイスラム教のように、戒律をもとに日常を過していくような、「意識的な裏付け」をもった敬けんな信仰をさしていることが多い。いわれてみれば、たしかにそういった気持ちでの信仰心をあまり感じたことはない。でもいろいろな調査によれば、九割以上の人が、特にお葬式は「仏式」で行うのがスタンダードな手法と意識している。またその後の供養も「仏教的な習俗観」のなかでいそしまれている現実がある。

この感覚を、私たちはあまり「宗教」的にはとらえていない。根底にあるのは、日本の風土が培った風習や伝承からきた無意識の習俗として日常に組み入れている。そこでの所作やしきたりの事例は、その原理をたどっていくと、仏教の伝来以前からの慣わしとして行っていることが検証できる。しかもそこに見られる習俗的な発想は、大部分、私たちの誰もに共通した象徴性や類感を生じさせ、それが道徳的な規範や日常生活の禁忌を伴っているとすれば、それはまさしく「宗教」と呼んで差支えがない。「教祖」や「経典」そしてそれを取りまとめるような「教団や組織」がなくとも、一つの宗教として充分機能し、伝承され、浸透している。

私たちはけっして無宗教ではなく、こともあろうに「自分たちの気がつかない宗教」を歴然と持っていることを前提に考えていかねばならない。それがとてつもない長い時間をかけて「刷り込まれた」、無意識の「宗教」であればあるほど、気がつかない矛盾をいまになって、消化しきれないでいる。社会的なもろもろの「不安」を、これをもってひとくちに語ることは出来ないにしても、少なくとも、お葬式やお墓参りといった、既存の宗教に触れざるを得ないとき、そこに集約して、その対象者である寺院、僧侶、あるいは葬儀関係者などに、いろいろな疑念や不信を生み出していることに違いない。

私たちの「習俗」が、たまたま伝来の仏教を「加工」して、それまで長い期間踏まえてきた俗習に「利用」した。以後「日本の仏教」として「宗教」としてではなく、「習俗」として浸透していく。当然ながら経典にはない作法やしきたりが、教義に優先した「民意」としてそこから表出される。その原理が宗教者側から「解説」されないと、「意味のない行為」という位置づけを免れない。伝承された形而上・表面上の呪物や所作・行為は、すべて「葬送の文化」に値する価値を内在させているにもかかわらず、である。

まして葬送や供養は、「死」にまつわる本能的な意識も投影され、日本人の平均的な人生観や終末観を含んだ「民衆哲学」として、重みを感じないわけにはいかない。つまり個々の生きざまと表裏をなした「深層の規範」といって差し支えないだろう。

もともと「宗教」という言葉は、明治になってからの翻訳造語である。だからこの「宗教」という言葉が当てはまるかどうかは別にして、民族が共通して共感できうる観念を背景にした伝承が、いまも引き続いてなされていることを理解せねばならない。

皮肉にも、このような理解に目覚めるのは、深層であるがゆえに、決ま

ってその崩壊を目の当たりにしたところから始まるのである。
それは、深層にある習俗観が宗教を「利用」出来なくなってきたところから始まる。

「こころの環境破戒」は寺院にまで浸透した

経済的には恵まれている社会のなかで、出口の見えないトンネルに入ったような、そんな気持ちを感じさせるような私たちの不安は、これまで体験したことのない「いるも落ち着かない心持ち」から発せられているのではないだろうか。

子供たちの新しい習慣やこれまでにない陰惨な事件が、私たちの年代からは、日常の理解を超えたところで渦巻いている。また著しい科学技術の進展は、それもなにやら予測のつかない新しい環境の変化を社会に投げかけ始めた。同時にそれは「こころの環境破戒」でもある。

ここ数十年の変遷は、世界的にも類をみない速さで世の中を変えてきた。戦後、一からの出直しを強いられた日本においてもそれはいえる。特に昭和三十年代からの移り変わりは、経済の高度成長を軸に、ハード・ソフト両面においても急激な変化をもたらしたものに「家」がある。
日常の機軸が「家」から「個人」に移り変わったのである。
ハウスとしての家の形状や核家族という社会環境、これがハードだとすれば、ソフトに値するものは、ホームという言葉であらわされる「家庭」。いわゆるニューファミリーという時代を象徴する豊かさや新しい形の親子関係など、どちらかといえば、生活面での豊かさを謳歌するなかで、いろいろな新しい知識や知恵を得たものの、自ら切り捨てていったものや気がつかないまま失われたものがある。その中にひとつに、どうやら私たちは「先祖を意識する心」を見失ってしまったようだ。

寺壇関係の崩壊もそういった時代の波に翻弄される中で、進行している。考えてみれば、「宗教でない宗教」を支えてきた伝承習俗は、まさにそれが見えざる精神的な規制となって、私たちに暗黙の了解とそこから得られる人とのきずなに、良き潤いを与えていた。仏教伝来以後は、実にその中枢として「お寺」がそのステーションを担っていた。宗教の教義に関係なく、先祖供養の習俗を墓地や伽藍といったハードを元に、時には強制的に、時には包括的に守ってきたといえる。歴史的にさまざまな軋轢を受けてもなお、寺院の役割がそこに見出されていたからこそ、安泰として今日にいたっているのである。

今一番懸念されることが、その役割と責任を自覚することのない寺院が、寺壇関係を当り前の既得権として、安閑と惰眠を貪って、みずからニューファミリー化している状況だということ。それまで私たちがあまり意識することなく、「そういうもんだ。」としてとらえてきた菩提寺が、時代の風潮に足並みをそろえ、自ら先祖供養の意義や意味を形骸化させてしまった。つまり戒名の授与や死者供養を寺院経営上の施策として、全て「金銭的な換算価値」に置き換え、同時にそれを当り前の慣例をして位置付けたのである。しかもその根拠を事前説明することなく、私たちにとって不明朗にしたまま、いわば先祖供養を「踏み台」にして経営の拡充に目を向けたわけである。
そうなったとき、私たちは素朴に考えざるを得ない。
「いったい先祖供養って何だろう？」
「菩提寺って何だろう？」
「お葬式をしなければならない理由は？」
こういった疑問に明快に答えることの出来なくなった僧侶や寺院の多いこと。それらは今、私たちがなくしてしまったものに、意味のない「値札」をつけ、さももっともらしく「商売」するようなことたいして、かなりの

不信と不満を内在させて、怒りをぶつける対象と化してしまった。またそれは自分自身にも投げかけられている、答を見失った疑問なのである。

面々と受け継がれてきた基層の伝承や本能的な「刷り込み」に際して、暗黙の了解だけではすまされない問題にまで発展した経緯がここにある。

これまで無意識にとらえられていた部分だから、霧散しても何も感じることがないのか?それは大きな間違いであると思う。

先祖供養という「目に見えない相手を対象とした」習俗は、知らず知らずのうちに「心のよりどころ」を私たちにあたえていた。

現状において「心の不安」は「心の病」を引き起こす。

心をむしばむ病根は、ひとつには、よりどころとしての心の糧を見失ったこと。こんなところから派生するおそれもあるのかもしれない。

既存の菩提寺を持たない人の多くは、お葬式を「因」としてお寺と関係することになる。それが今後、よき寺壇関係の「縁」となりうるかどうか?

私は極めて疑問に思う。

それは、「因」にあたるお葬式からすでに、僧侶としての自覚や責務をないがしろにしている様子が数多く見られるからである。そのような僧侶や寺院に、とても心のよりどころを求めていくわけにはいかない。

こういった現状から必然的に寺壇関係は崩壊しつつある。

同時に私たちに「利」と「理」のまるでない寺壇関係は、どんどん解消していかねばならないと思うのである。

葬送文化研究会　事務局長　日本葬祭アカデミー
㈲セピア　代表取締役

葬送文化研究会　会則

平成9年1月

名　称
第1条

この会は「葬送文化研究会」（略称「葬文研」。以下本会という。）

目　的
第2条

本会は各種の事業活動を通じて、会員相互の交流を元に葬送文化への関心と理解を深めることを目的とする。

事　業
第3条

本会は、前条の目的を達成するために次の事業、活動を行う。
(1) 会員相互の経験、知識及び意見の交換による研究
(2) 研究会、講演会等の開催
(3) 刊行物の発行
(4) その他前条の目的を達成するための必要な事業

会　員
第4条

本会の会員は、個人会員、法人会員とし、ともに会員とする。
本会の運営役員は原則として会員より選出する。
会員は規定の会費を納めなければならない。
会員は、本会の各種資料等の利用が要請によって出来る。

入　会
第5条

会員になろうとする者は、所定の会費を添えて、入会申込書を事務局宛に提出し了解を得なければならない。

会　費
第6条

個人会員は年会費12,000円とする。
事業活動参加は記名本人に限定される。
法人会員は年会費25,000円とする。
事業活動参加は記名企業名の社員であれば無記名にて2名まで参加できる。
会員以外の不定期な参加（ゲスト、見学参加等）については、
その都度参加費を徴収します。

総　会
第7条

1項　総会は次の事項を議決する。
(1) 会則の制定及び変更
(2) 役員の選任
(3) 事業計画及び事業報告
(4) 予算及び決算
(5) その他、事業及び会の運営に関わる重要な事項

2項　総会（定期及び臨時は会員総数の出席をもって成立し、
出席会員の3分の2以上の賛成挙手により議決するものとする。
この場合、委任状を提出したものは、出席とみなす。

3項　定例総会は、毎年1回開催する。

4項　臨時総会は会員の要請にて会長が召集する。

役　員
第8条

本会には、次の役員を置き、原則として会員の中から選任する。
(1) 会長1名
(2) 顧問若干名
(3) 幹事15名以内
(4) 事務局長幹事の中から1名
(5) 会計幹事の中から2名
(6) 監査2名

任　期
第9条

役員の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

選　任
第10条

役員は会員の中から選出され総会の決議を元に承認されることとする。

職　務
第11条

「会長」は本会を代表し、本会を統轄する。
「顧問」は会長、事務局長、及び幹事会より、会の運営に関する助言が求められた場合にこれに応ずる。
「幹事」は本会の運営に加わり、その職務にあたる。
「会計」は本会の収支を管理する。
「監査」は決算報告並びに事業報告を精査し、定例総会他、会員の要請による臨時総会時にその結果を報告する。

幹事会
第12条

幹事会は、幹事により編成し、本会の事業の運営にあたる。

事務局
第13条

本会の事務を処理するため、事務局を設置する。

退　会
第14条

退会しようとする会員は、事務局あてに届出をする。

除　名
第15条

以下の各項、何れかに該当する事を由として会員の除名を行うことが出来る。その際、総会での議決を経て、その旨を当該会員に通知する。
A ：会費等の未納状態が続いている者。
B ：自らの業務を目的として他会員に対する働きかけの甚だしい者。
C ：本会の名誉を著しく損なった者。
D ：この他、本会及び本会々員に対して問題があるとされる者。

事業年度
第16条

本会の事業年度は4月1日から翌年3月31日までとする。

会計年度
第17条

本会の会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。

雑　則
第18条

この会則規約は、平成9年4月1日より施行する。

葬送文化研究会会報（第3号）

発行　葬送文化研究会
会　長　天野　勲

事務局
〒102-0081
東京都千代田区四番町６－３－３１１
TEL ０３－５２１５－５７６７
事務局長　二村祐輔

発行日　平成１２年９月４日

編集　杉浦昌則　勝山宏則　吉澤武虎

印刷　(有) スタジオ創造